発行日　1990年2月20日発行（毎月20日発行）通巻97号
1982年8月16日第三種郵便物認可
ISSN 0289-6680

Trial & Error (トライアル・アンド・エラー) No.97

試行錯誤

特集　在日外国人と日本社会

日本の国際化を足元から考える …… 2
花嫁輸入業の人権侵害 …… 3
ある農村の国際化 …… 4
外国人労働者 …… 6
定住難民の'80年代，そして'90年代 …… 8
在日韓国・朝鮮人の現状を知れば
　定住難民の未来が見えてくる？ …… 11
ノイくんがんばる …… 14
JVCフォトコンテスト …… 15
エチオピア，再び飢餓に …… 19
JVCニュース …… 26

JVC Japan International Volunteer Center

特集　在日外国人と日本社会

日本の国際化を足元から考える

1989年は，東欧の激動で幕を閉じた年であったが，日本に関して言えば中国やベトナムからの漂着難民で揺さぶられた年であったと言える。それ以前のベトナムボートピープルと違って，直接日本を目指して大量の人々がやってきたこと，必ずしも政治的な圧迫による本国脱出ではなく，中国からの偽装難民に典型的にみられるように，母国での経済的な貧しさを逃れ「豊かなニッポン」へ憧れて来た人々が多かったことなどが，新しい状況であった。

これらの大量の人々の日本上陸は，黒船の出現に慌てふためく江戸庶民さながら，日本社会の各方面に，うろたえにも似た混乱を巻き起こした。彼らを受け入れるべきか，追い返すべきか。人道的観点から対処すべきか，出稼ぎ労働者の海路版と見なすべきか。マスコミが評論家が政治家が，そして市民がてんでに発言した。エイズ問題にひっかけた低俗なマスコミ報道もあらわれるなど，問題の所在を充分に捉えないうちに表層的な（ある時には感情的な）議論だけが先走った1年であった。日本社会はこのように「外部からの異物の侵入」に敏感に反応する構造を持っている。いまだ「日本人単一国家論」に見られるように，社会のあらゆるレベルで，異質なるものを排斥しようというメカニズムがはたらくようである。

そうした意識がはたらくなか，現実の社会を見れば，好景気に支えられた建設ラッシュの現場で，中小の下請け工場で，フィリピンやパキスタンからやってきた出稼ぎ労働者達が必要不可欠な労働力として日本人とともに汗を流しており，新宿をはじめとした日本国中の盛り場では，タイやフィリピンからきた若い女性がホステスとして客の接待に携わっている。また，日本の農業の崩壊を背景として農村で始まったフィリピン人花嫁も，都市部に比重を移しながら増え続けている。

これらの出稼ぎ労働者やフィリピン人花嫁が，円高に象徴される豊かな日本を目指してやってきた最近の「異質な人々」であるとしたら，第二次世界大戦当時の強制連行に端を発した在日韓国朝鮮の人々，そして，既に10年を経過したインドシナ難民などは長期間に渡って日本社会の閉鎖性に苦労してきた「異質な人々」であると言える。後者の人々の困難は，その存在の経緯や彼らが故国に簡単には帰れないという事実ひとつとっても大変なものであったろう。

今回の特集では，現在日本に住むこれらの人々が，日本でどのように生活し，どのような困難に直面しているかを，それらの人々に直接間接に関わっている人たちにレポートしてもらった。日本は大きな経済力を身につけたものの，地球環境にしろ南北問題にしろ何ら独自のビジョンを持ちえない。国際化が叫ばれながら，実際にはかたくなに領域を固めて，内には異質なものを受け入れず，外にはアジアをはじめとして，世界中の途上国を国際的商品流通システムに組み入れることを至上命令としつつ，侵出している。そんな日本社会が，内に抱える矛盾と問題点を明らかにしていき，足元からの国際化をはかることによって，世界中の人たちとのつき合い方がわかるのではないか。21世紀を迎えるにあたり，世紀末の最後の10年をいかに生きるか。その生き方によって，日本が世界の中で孤立せず，共に生きる仲間として受け入れられるか，否かがかかっている。(山口)

花嫁輸入業の人権侵害 その現実と展望

中村尚司

女と男が一緒に暮し，子供を産み育てるのに国境はいらない。国家という体制が出来るよりもはるかに昔から人々は，多様な通婚様式を見いだし，その結婚にふさわしい家族生活を営んできた。国家という権力機構が猛威をふるう現代にあっても，人間の女と男にとって大切なのは，どのような関係を築き上げるかである。国内結婚か国際結婚かは，二人の関係にとって本質的な事柄ではない。

現代社会においては，しかしながら，国内結婚と国際結婚との間に慣習や法制による厚い壁がある。とはいえ，言語や文化の違いは，お互いの関係をより豊かにする大切な要因にもなる。また，習うより慣れることによって克服できる。制度上の違いが国際結婚を不利にしているとすれば，当事者やまわりの人々の努力目標は，国家の厚い壁に穴を開け，堀り崩す方向に置かれるべきであろう。

そんな自明の理をいまさら説かなくても，誰でも判っている，という声が読者から返ってくるにちがいない。しかし，この自明の理に逆行して，厚い国家の壁を巧みに利用し，濡れ手に粟のアジア人花嫁輸入を企てる業者が急増しているのである。許欺瞞着に近い花嫁輸入ビジネスに乗り出し，巨額の利益を得ているのは，通常の輸出入貿易には何の経験もない人たちである。アジアの言語や文化にも，地域住民の基本的人権にも，あまり関心をもたない人たちである。国家の壁が，富の源泉であることに目をつけたビジネスマンである。

アジア人花嫁輸入業の出現を可能にした条件は，日本経済の高度成長を担ってきた人々の社会的な関係の貧しさである。会社中心主義の形成に参画するという唯一の価値のもとに，全社会を組織した日本人の貧しさである。非会社組織であるはずの公官庁も，農協も，学校もすべて会社モデルの価値体系を取り込むことによって，国際的な競争力を強化した経済政策の貧しさでもある。

男どもが会社組織もしくは会社類似組織の価値体系に引き寄せられ取り込まれてゆくのに対応して，女たちも自ら会社主義の担い手になるか，さもなくば会社を担う男を配偶者に選びがちである。画一的な価値体系が支配する日本では，会社離れの暮らしをする人間は，それだけで魅力のない落後者であるかのように誤解される。独立自営の農民が，ジャクソン以来民主主義の基盤として高く評価されてきたアメリカとは異なっている。自営農民や漁民だけではない。大工や左官をはじめ都市の自営業者も，会社組織に編入されていない限り，配偶者を見つけることが困難である。

とりわけ学歴の低い男たち，心身に障害のある男たち，30歳代後半まで結婚しなかった男たち，職場を転々と変えた男たちは，会社主義者に敗けない人間的魅力があっても結婚できないことが多い。そこへ目をつけたのが花嫁輸入業者である。日本の会社主義が栄えるかぎり，彼らの商魂は市場の拡大を見込んでたくましくなる。

花嫁を送り出す方の事情は何か。国や地域によってさまざまである。しかし，日本の会社主義と無縁ではない。ペソ，バーツ，ルピーなどに対して年を追って強くなる円の購買力が，若い女性を日本へ駆りたて，巨万の富を夢見させるからである。日本の会社がふりまく夢は，アラビアの王子様のように輝いて見える。日系企業の進出が活発になればなるほど，日本への憧れも強くなるのである。

入管統計によれば，1987年に日本人の配偶者として入国した外国人（在留資格4－1－16－1）は，3,442名である。同じ年に他の在留資格から上記の配偶者ビザに変更した人は，8,191名である。合計11,633名がこの年に国際結婚を届けた外国人の総数ではない。日本で生まれ育った定住外国人や他の在留資格のままで結婚した人を含まないからである。国籍別に見るとフィリピン人の3,238名が第1位である。1989年には5,000名を越えたと推計されるように増える一方である。このうち何名が輸入業者の斡旋によるものか明らかにする統計はない。輸入業者数も500を越えると見られているが正確な数は誰も知らない。

商品として輸入され，一人当たり3，4百万円で斡旋される花嫁は増え続けている。結婚して半年たっても妊娠しないという理由で一方的に離婚させられるケースも増えている。しかし，彼女たちが直面する困難を相談したり，基本的人権の侵害を訴えた

りするための行政機関は存在しない。ボランティアの役割が強く求められている分野であろう。

国際結婚の商品化がなくなるのはいつの日か。フィリピンやスリランカの男女が商品ではなく，人格として日本の男女と直接的に向い合い，国内と変わらない自然な共同生活に入るためには，日本社会が変わらなくてはならない。しかし，求められているのは，革命の時代のような権力奪取の担い手ではない。国境を越えて暮す人々の人権を守り，そして日本の会社主義を変革するという，長年月にわたる持久戦に耐えねばならないのである。単一の会社至上主義から距離を置き，二重の生活を生きるボランティアこそ，新しい時代の要請に答える変革の主要な担い手であろう。

なかむら　ひさし　竜谷大学経済学部教授
南インド・スリランカの農村社会研究を通して，人間を商品化しない経済学の確立をめざす。

スリランカ事情

中村尚司

1989年9月23日，コロンボ市のプンニャ・ダサナーヤカ婚姻登録官宅を訪ね，インタビューした。彼女の副業は，日本の輸入業者のために若い女性を集め，供給するビジネスである。来日したスリランカ花嫁の半数以上が，彼女の発給した婚姻証明書で配偶者ビザ（4－1－16－1）を取得している。以下，彼女の発言の一部を収録する。

「日本へ行って結婚したいという，若いシンハラ女性は沢山いる。コロンボのような都会の女性は日本人との結婚に向かないが，農村部には気立てのやさしい女の子が多いので，いくらでも集められる。結婚相手のいない日本人男性にも，実家に送金できるスリランカ女性にも，共によい結果をもたらすビジネスだ。アラブ産油国へメイドとして出稼ぎに行くよりはるかに良い」

「困った問題は，日本の輸入業者の質が悪いことだ。金に汚すぎる。その上，日本人男性の年令や職業について平気で嘘をいう。約束も守らないことが多い。利益の公平な分配を保証するビジネスをしたい。そんな業者がいたら紹介して欲しい」

ある農村の国際化　朝日町の実情

相川俊英

「HAPPINESS & SUCCESS，日比結婚」こんなタイトルのシンポジウムが，1989年10月に山形県の小さな町で開かれた。山形県西村山郡朝日町。絶望的な嫁不足に悩み抜いた末，全国に先駆けて行政主導の国際結婚に踏み切り，4年前にフィリピンから9人の花嫁を迎えたあの町である。シンポジウムの目的は，国際結婚の中間報告と，今後の日比友好のあり方を探ろうというもので，様々な批判を浴びた不自然な形の国際結婚も，ここ朝日町では大きな波乱もなく，うまくいっていることをアピールすることに終始した。参加者は約30人。うち半数が地元の人たち。そして，残りの山形県内外から集まった人たちのほとんどは，嫁不足という持病に苦しむ農山村の役場関係者たちだった。フィリピンからは，花嫁の家族や町長など15人が来賓として招待された。

参加者を前にして，フィリピン花嫁の夫や姑，地区の代表や若妻会のメンバー，それに花嫁の職場の上司などが次々とマイクに向かい，緊張しながら報告した。報告は異口同音，花嫁たちがいかに涙ぐましい努力をしているか，周囲の人もどんなに温かく見守っているかという内容ばかり。当の花嫁もだいぶうまくなった日本語で，「今後も皆さんのご支援よろしくお願いします」と何度も繰り返し，会場の人々に頭をさげた。その健気な姿に心を打たれたのか，あちこちでハンカチで涙を拭くジッちゃんやバッちゃんの姿が見られ，フィリピンからやってきた花嫁の家族たちも目頭を熱くしていた。

会場には，海を越えてやってきた彼女たちを温かく迎えるのだという思いやりが溢れていた。だが，どこか空々しさも漂うのだ。失敗が許されないことをはじめてしまった圧力を，誰もが全身に受けている，そんな息苦しさを感じた。全体質疑のなかで，町の青年団の一人が，「俺はやっぱり日本人と結婚したい」と本音を語ったが議論を呼ばず，会場をシ

ラケさせただけに終わった。会場には，不自然な国際結婚に反対する女性団体のメンバーもいなければ，取材に訪れた記者もほんのわずか。もはや，外国人花嫁の問題は，その是非をめぐって激しく議論する問題でも，世間の関心を呼ぶテーマでもなくなったかのようだった。

実際，業者を仲介する国際結婚は，別段珍しいものではなくなっている。朝日町が清水の舞台から飛び降りる決意で踏み切った国際結婚も，今では全国津々浦々に広く深く浸透している。しかも，朝日町のような行政主導型ではなく，個々人が密かに仲介業者に依頼する事例が増えている。こうした国際結婚は過疎地の農山村にだけでなく，都会にも広がった。都会では，農村のように行政が結婚の面倒をみることはないし，なにくれとなく世話をやいてくれるような人間関係もない。そのため，仲介業者の活躍の場は，都会の方が大きく，東京を中心に，国際結婚仲介業者が急増している。「金儲けの業者が横行し，悪い例ばかり目にしている」マニラ在住の業者がシンポジウムでこう語った。こうした国際結婚のトラブルは，都会の方で多く見られるという。都会には嫁姑の問題もなければ，隣組や若妻会といった煩わしい人間関係はない。一見快適な人間関係の希薄さが，脆さになっているようだ。

結婚が難しくなっている背景には，あらゆる人間関係が希薄になってきているということがある。誰もがあたりさわりのない，手軽な人間関係に終始しがちだ。人と人の関係が薄いものになるにしたがって，金銭で処理することが増えてくる。人とのつき合いより，金とのつき合いの方が得意だという人が確実に増えているようだ。

また，多くの女性が，「結婚偏差値」というものさしで男性を見ることも結婚を難しくしている。高収入で高学歴で背が高い人，理想の3高条件から大きくはずれる男性は，性格や人柄に一切関係なく，あっさり結婚対象から除外されてしまう。「結婚偏差値」の高い人と結婚すれば，間違いなく幸福な生活を送れると固く信じて，たくさんの女性がやっきになっている陰に，一方的に「結婚偏差値」が低いと判定され，結婚が絶望的になった男性が増えている。こうして登場したのが経済格差に目をつけた国際結婚だ。

「愛したから結婚したのではない。いい生活がしたかったから日本人と結婚した」あるフィリピン人花嫁は，シンポジウムで率直に言った。愛情は後からついてくると言うのだ。夫は黙ってそれを聞いており，会場にいたお年寄りたちは，その通りと言わんばかりにうなずく。なぜアジアから花嫁がやってくるのか？　この疑問は，彼女の説明でとりあえずは氷解する。極論すれば，彼女たちは日本の誰それという男性と結婚したのではなく，日本の経済的な豊かさと結婚したのだ（もちろん，豊かさについては様々な誤解と錯覚があるが）。だからといって彼女たちを非難するにはあたらない。日本人も同じことをしているからだ。彼女たちは，人身売買されたのでも，親の命令に従ったのでもなく，自らの意志で人生を選択し，日本にやってきた。尋常ではない過程を踏んで日本人と結婚したからと言って，ただちに「悲劇のヒロイン」と見るのはまちがいだ。しかし，フィリピンと日本との間にこれほどまでの経済格差がなかったら，彼女たちもはるばる海を越えて日本に来ることはなかったであろう。今，彼女たちは言葉や文化の違いなど様々な障害を乗り越え，たくましく日本の大地に根を張ろうとしている。

「ダメだったらフィリピンからもらえばいいや」「母親に，できることならフィリピンからもらわないでねと言われた」こんな嫌な会話が当事者を前にして語られる。日本人の本音なのだろう。農村では，とくに冷たい視線を浴びるのか，日本人の夫は概して口を固く閉ざしがちである。そして，不自然な関係からはじまった結婚を，なんとか自然なものにしようと懸命に努力しているようにみえる。「気持ひとつですよ。長い目で見てもらいたいですよ」批判の声を意識して，ある日本人の夫はポツリと語った。すでに子供も誕生している。

彼らが選択した国際結婚は，彼らが考えた以上に大きな問題となっている。それは，この結婚の裏側に，様々な問題が隠されていたからだ。彼らは当事者としてそれらと向き合わなければならない。家族も地域も，そして行政もトコトンそれにつき合わなければならない。口先だけの国際化や，いいところだけの国際化とは質が違う。日常的で瑣末でぶつかり合う，人間摩擦レベルでの国際化と言ってもいい。

夫婦や家族，地域の人々がお互いを尊重し合い，いい人間関係を作るということ，私たち一人ひとりが求められていることでもある。

あいかわ　としひで　　文化放送記者。
日本とアジアの関係をテーマに，出稼ぎ労働者，フィリピン人花嫁などを追っている。

外国人労働者

菊池陽一

私が初めて日本で働く東南アジアの人たちとつき合ったのは，もう20年も前の学生時代であった。その頃，ベトナム戦争の影響で，たくさんの金持ちの南ベトナム人子弟たちが，身の安全を目的に留学という形で日本に来ていた。彼らは，最初は親からの仕送りで大学へも行かず，ブラブラと遊んで暮らしていた。しかし，戦争の悪化につれて仕送りが途絶え，自分で生計を立てなければならない状況に追いやられてしまった。

当時，自活生活をしていた私は彼らに興味を持ち，自分のアルバイト先で一緒に働くよう無理に勧めた。いわゆる親切の押し売りである。彼らと私は初めの1カ月は，仲良く一緒に休みなしで深夜まで働いた。彼らは，アメリカかフランスに移住したいという気持ちが固まっていて，その資金を作りたいと一生懸命であった。ところが1カ月が過ぎた頃から，いろいろな問題が，私と彼ら，彼ら同士，そして会社との間で起こりはじめた。私は彼らを非難した。私は彼らとつき合うことの苦しさから，日本人として排他的な行動をとってしまっていたのだ。

今，東南アジアから，好景気の日本をめざしてたくさんの外国人出稼ぎ労働者がやってくる。その数は数十万人と言われている。一般の日本人は，巷にあふれている表面的な情報の中から，彼らのことを知り，ときに街で目にするぐらいで，あまり関心はない。騒いでいるのは，国とマスコミ，一部のボランティアグループ，そして中小企業の経営者だけである。しかし，一旦自分との利害関係が生じれば，誰でも日本人意識を丸出しにし，彼らを排斥しようとする姿は今も昔も変わりない。

私は，1970年代半ばからフィリピンに10年暮した。'70年代の日本は，高度経済成長をはたし，海外への経済進出を盛んにしていた。フィリピンのいたるところに日本製品が氾濫し，日本製品なしでは生活できないほどだった。

経済は低迷し，失業率が高く，加えて政治が不安定なため，フィリピンでは古くからアメリカへの出稼ぎが行われていた。やがて石油景気にわく中東諸国への出稼ぎが大々的にはじまったが，出稼ぎに行けたのは運のいい人たちである。ほとんどの人たちは，貧困のなかで，なすすべもなくその日暮しを続けていた。

一次産品の価格が下落し，工業化も伸び悩んでいたフィリピンで，政府は外貨獲得のため，「フィリピンのきれいな海」というキャッチフレーズで観光に本腰を入れた。しかし，経済的余裕ができ，海外旅行も手軽にできるようになった日本人が飛びついたのは，「フィリピンのきれいな女性」であった。やがて，セックスツアーはフィリピン社会から非難を浴び，日本国内でも社会問題としてクローズアップされたため下火となるが，困ったのは，セックスを提供することでやっと生活の糧を得ていた人たちであった。

一方に職にありつきたいフィリピン人がいて，他方にそれを利用して金儲けをたくらむ日本人がいたことから，フィリピン女性を歌手やダンサーという名目で，日本に送り込む「ジャパゆきさん」が出現した。続いて，アメリカや中東に出稼ぎに行っていた人たちも，日本の方が儲かると，出稼ぎで貯めたお金で高い日本行きの切符とビザを買って日本へ来はじめた。日本に入港したとき船を降り，そのままいついた外国船の船員，日本に出稼ぎに来ている兄弟から切符代を送ってもらってやって来る人など，様々な方法でたくさんの人たちが日本にやって来ることになった。フィリピンの日本大使館の前には，かつてのアメリカ大使館のように，朝早くからビザ申請のための長い列ができ，食べ物屋の屋台まで出ている。彼らにとっても，異国で働くということは大変なことである。しかし，日本で得たお金がフィリピンで10倍もの価値があるとしたら，期限つきの

写真提供／伊従直子

我慢があまり苦にならないのは私たちも同じだ。

日本にやって来るフィリピン人の多くは，中流以上の人たちである。彼らの中には，弁護士，医者，俳優，国家国務員など，エリート組もおり，そのほとんどは自分の職業を明かさず，土木作業員として黙々と働いている。運悪く入国管理局につかまったり，作業中ケガしたりする人たちがいるが，そういう人たちに限って貧しく，まわりから金をかき集めてやってきた人であったり，大都会マニラを越えて一足飛びに日本にきた，田舎の人たちだったりする。

しかし，最も貧しい人たちが，日本に来ることはほとんど不可能だ。彼らは一生貧しい暮しから抜けられない。それどころか，知的労働力が流出するため，国内の経済が悪化したり，出稼ぎに行ける人たちが裕福になることによって，フィリピン人のあいだの貧富の差はしだいに開いてきている。

もともと，開発途上国と言われている国では，人々は農業を主体とし，生態系に順応して，安定した生活を営んでいた。そこへ植民地化，プランテーション，工業化，市場拡大など，先進国経済が無理に入ってきてしまい，現金収入なしでは生活できなくなってしまった。急激な経済改革の恩恵は，すみずみまで浸透せず，先進国と一部の人たちだけに利益をもたらした。富める層が生まれると同時に貧しい層が生まれ，その格差は拡大を続けている。

さて，日本で外国人労働者はどのように生活しているのだろうか。私のかいま見た彼らの生活を記してみよう。彼らの滞在は非合法である。そのため，いつもうしろめたさがつきまとい，本音が言えないもどかしさのなかにいる。彼らは小さい時から，したたかに生きてきたので，日本という異なった環境でもとまどわない。ただ，寂しさだけは克服するのが難しいようだ。日本人よりも家族のつながりが強く，家族を大切にする彼らが，日本に長くいたために，家族間の関係がぎくしゃくし，自分も精神的にだめになってしまうことがある。寂しい彼らの楽しみは同じ境遇の同国人たちとの交流である。しかし，仲よく一緒に生活しているうちは楽しいが，仲間外れにされるとまったく惨めなことになってしまう。

外国人労働者と，本音でつき合っている日本人は，彼らといっしょに働いている肉体労働者たちや，パート先の主婦たちなどである。底辺で，このような小さな国際化が進んでいる一方，日本人の多数は，無関心，あるいは排他的になっている。

最近は，外国人労働者を支援するボランティアグループが，様々な形で関係を作っているが，一般に，日本のボランティアは，ハード面（金を集めたり，組織を作ったり）ばかり考えて，ソフトな面（人と人とのつき合い）をなおざりにしがちである。経済的に余裕のある人たちのなかには，親切の押し売りをして自己満足の世界に入り，本質を捉えようとしない人たちがいる。おせっかいも過ぎれば外国人労働者の自助努力をスポイルしてしまう。また，純朴に彼らに接し，うまく利用されて被害を受けてしまう人もいる。同族意識でかたまりがちな日本人は，外国人労働者たちとのつき合いに慣れていない。一歩まちがえれば，彼らを虐待してしまったり，逆に食い物にされたりと，対応は両極端になりがちである。

「日本におけるタイ女性の性収奪」という記事のカット。バンコク・ポスト（'89. 9. 19）

日本経済の好景気が続くかぎり，外国人労働者は来続ける。大切なことは，私たちが自分の身近にいる彼らと積極的に友だちになり，お互いの心を開いて，つき合えるようになることである。そうすれば彼らの国のことを，もっと身近に肌で感じ，南北の経済格差の大きさを，私たち一人ひとりが知ることにもなる。不公平な分配で生まれた富める国と貧しい国。富める国日本に，ほんのひとにぎりの分配をいただきに，頭を低くして来る外国人労働者たち。彼らの貧しさが私たちの豊かさと無関係ではないことを自覚すれば，おのずと私たちがすべきこと，そして，してはならないことがわかってくると思う。

きくち　よういち
歯科医。横浜の寿町に住み，フィリピン人をはじめとした出稼ぎ労働者たちと普段着のつき合いをしている。

定住難民の'80年代、そして'90年代

小野豪大

はじめに

現在，日本には6,362人のインドシナ難民が定住している。内訳はベトナム4,405人，ラオス878人，カンボジア1,079人となっている（1989年11月末現在）。当然のことながら，この6,362人の中には，定在10年以上の人もいるし，数カ月の人もいる。つまり日本社会に慣れた人もいれば，まだ右も左もわからない人もいるということだ。インドシナ難民あるいは定住者といっても様々なレベルで様々な困難を抱える人がいて，ひとまとめできない。上記の数字には，難民事業本部で確認できただけでも70人近くの日本国籍取得者が含まれているが，彼らは，もはや法的には日本人なのである。

しかしながらこの小稿では，便宜上，この6,362人を「インドシナ難民」，あるいは「定住者」とすることを許されたい。以下，おもに80年代における日本社会の受け入れ環境の整備と，それにともなう定住者のニーズの変化を概括し，90年代に予想される定住者の動向と日本人の態度について私見を述べてみたい。

本邦定住難民の推移

1989.11.30現在＜外務省調べ＞

	定住数	内訳				定住数累計
		元留学生研修生等	ベトナムからの合法出国者（ODP）	海外のキャンプから定住した者	国内一時滞在施設から定住した者	
1978年 計	3	0	0	0	3	3
1979年 計	94	0	0	92	2	97
1980年 計	396	0	0	346	50	493
1981年 計	1,203	* 742	20	393	48	1,696
1982年 計	456	0	23	217	216	2,152
1983年 計	675	0	32	248	395	2,827
1984年 計	979	0	12	229	738	3,806
1985年 計	730	0	6	240	484	4,536
1986年 計	306	0	28	149	129	4,842
1987年 計	579	0	26	291	262	5,421
1988年 計	500	0	143	193	164	5,921
1989年1月	22	0	0	9	13	5,943
2月	21	0	0	0	21	5,964
3月	47	0	11	32	4	6,011
4月	59	0	36	0	23	6,070
5月	17	0	7	0	10	6,087
6月	80	0	39	26	15	6,167
7月	55	0	16	33	6	6,222
8月	32	0	0	15	17	6,254
9月	28	0	0	20	8	6,282
10月	55	0	0	49	6	6,337
11月	25	0	6	10	9	6,362
計	441	0	115	194	132	……
合 計	6,362	742	405	2,592	2,623	……

定住者の国籍別内訳	元留学生	ODP	海 外	国 内	計
ベトナム	625	405	752	2,623	4,405
ラオス	73	0	805	0	878
カンボジア	44	0	1,035	0	1,079
計	742	405	2,592	2,623	6,362

（注）定住数には，本邦定住後の出生数は含まれていない。

* 1975年4月以降に，留学生や研修生の資格で来日し，54年4月に難民と同様に定住を認められることとなったもので，1981年4月の閣議了解により定住枠に組み入れた。

日本社会の受け入れ環境の整備（ハード面）

1975年のベトナム戦争終結後，インドシナ三国は相次いで急激に社会主義化し，その結果，政治的弾圧や内乱が激化する中で，大量の人々が国境を越えた。この人々をインドシナ難民というのはもう既知のことと思うが，日本が初めて彼らの定住を認めたのは，1978年のことであった。そのとき滞在中のベトナム難民に定住を許可したのを皮切りに，1979年にはラオス，カンボジア難民にも門戸を開き，定住枠も500人とした。

一方，1979年，1980年には，各々姫路定住促進センター，大和定住促進センターが開所され，以来，日本語教育，社会適応訓練，職業指導などのプログラムが実施されている。また1983年には，第三国定住がはかどらず滞留中の一時滞在難民に対応するため，品川に国際救援センターも開設された。定住枠も当初の500人から，1980年に1000人，1981年に3000人，1983年に5000人，そして1985年に10000人と徐々に拡大され，現在に至っている。

こうしてインドシナ難民の受け入れ対策が整備されるなか，国内法の画期的な改正が行われたことは特に明記しておかねばならない。1982年の難民条約の発効にともない，まず「出入国管理令」が「出入国管理及び難民認定法」となり，法務省が難民の認定審査を行うようになった。そして社会保障関係の4つの法律，「国民年金法」「児童手当法」「扶養手当法」「特別児童手当法」の中の国籍条項が削除され，インドシナ難民のみならず，在日朝鮮・韓国人などの在日外国人にもこれらの法律が差別なく適用されることになったのである。

日本社会の受け入れ環境の整備（ソフト面）

受け入れ環境の，なにをソフト面というのか。それは「ひと」，つまり日本人一般を指すのだが，インドシナ難民への理解度（受容度）はこの80年代，望ましいレベルまで達したのだろうか。

残念ながら答えは否である。日本人一般の，定住者に対する理解促進を妨げる障害として，小松隆二氏はその著書『難民の時代』（学文社）の中で次の4点を挙げている。

①外国人に対する排他意識
②アジア・アフリカ人に対する蔑視意識
③人口移動に対する自国本位視点
④入国管理行政に対する国民の関心・認識の欠如

これらの障害を越えたところに望ましいレベルと

ラオスの優雅な伝統舞踊

いうものが見えてくるが，そう簡単に克服できるものではない。1989年，つまり80年代の終わりには，中国からの「経済難民」来航激化と外国人労働者の急増とが世間を騒がせたが，人道的な見地から根本解決を図ろうとする動きよりは，否定的な感情論が横行していた。それが，既に定住しているインドシナ難民にまで飛火したという報告もあり，この事実にみる限り，日本人の理解度もまだまだと言わざるを得ない。

しかしながら，80年代はインドシナ難民の大量流出を契機として設立されたNGOや，それよりやや遅れて国内で定住者支援に尽力するボランティアグループの活動も活発になってきた。とくに関東周辺には20近くの団体があり，日本語学習，生活相談，文化活動などを通して，定住者理解の輪を少しづつ広げることに貢献している。またエスニックブームによって，インドシナ各国の伝統舞踊，料理，衣装，装飾品に興味を持ったり，学校や公民館などで定住者と共に異文化理解の教育プログラムに取り組んだりする例も，あちらこちらで見聞きするようになってきた。

定住者のニーズの変化

上述のような日本社会の受け入れ環境が整備される過程において，定住者のニーズはどのように変化したのであろうか。

異文化圏にマイノリティとして生活せざるを得ないため，当然のことながら定住者にも様々な「気がかり」がある。日本語理解，就労，生活習慣，社会制度，日本人との関係，結婚・離婚，健康・医療，母国の情勢，将来，子どもの教育など，挙げていけばキリがない。こうした「気がかり」を解消し，より快適な生活を営むためには，大きく分けて，適応に関するニーズ，文化に関するニーズの2つがある。この2つのバランスはこの10年で変化してきた。こ

の変化を見れば，定住者の90年代の状況を予見するのに役立つ。

80年代の初め，定住したインドシナ難民の第一義的なニーズは，適応に関するニーズ，すなわち日本語・生活習慣に慣れ，日本人と協調していくための技術を身につけるということであった。日本人に同化するためではなく，この日本社会で最低限「世渡り」できるための技術である。文化に関するニーズ，すなわち母国の言葉，伝統的な舞踊・料理・習慣全般などを維持・継承していくことは第二義的なもので，日本人がまだ異文化を受け入れる懐が狭かったうえ，定住者自身もそれほどの重要性を感じていなかった。つまり，それだけ「適応」の方が必須課題であったのである。

しかし，次第にインドシナ各国からの同胞が増え，一方で滞在年数の長くなった子どもたちがどんどん「日本人化」してきた80年代の終わり，文化に関するニーズが高まってきている。定住者の数が増えるということは，母国のことばを話し，伝統無踊や料理を楽しむ空間が広がることを意味している。また日本で成長してきた子どもたちは，「日本人化」する一方で母国語を忘れ，母親の作る母国の料理さえも嫌う傾向にあるという。それを危機的現象と見た大人たちは，最近，子どもたちに母国語を習わせるための教室を自主的に始めている。以上の例は民族固有の文化に関するニーズであるが，定住者はこの動きを上回るような勢いで，日本人と同じ文化活動も享受し始めている。つまり文化に関するニーズといっても，それは「母国へ向かうもの」と同時に「日本へ向かうもの」という2つの側面があるといえよう。

90年代にむけて

以上，定住者を取り巻いてきた80年代を見てきたが，日本社会（日本人）にとっても，定住者にとっても試され，学んできた10年であった。そうした流れを踏まえて，2000年までの10年間，つまり90年代を考えてみたい。

まず，文化に関するニーズを求める人が増えることが予測される。定住者は国内情勢が安定してきた母国への「里帰り」あるいは「帰還」へと向うかもしれない。逆に，「日本人化」がどんどん進み，日本人と同様な文化活動を求める傾向も強まるであろう。せっかく民族性をアピールできる受け皿が日本人側にやっと広がってきたのに，表現するべき素晴らしい民族文化はもう既に失ってしまっているという現象が，深刻な問題となるかもしれない。

一方，適応に関するニーズは，新しい定住者が来日し，日本社会（日本人）と直面する限り続く。日本政府は，ラオス・カンボジア難民に関しては縮小，ベトナム難民に関しては東南アジア各地のキャンプより今後3年間で1000人の受け入れを明言している。かなりのレベルで適応を迫られる人たちは簡単にはなくならない。また「日本人化」する中で，実際に日本国籍を取得する人たちも，80年代よりもずっと早いスピードで登場してくるはずだ。

受け入れ環境については，ハード面では，定住者理解がより充実すると思うが，ソフト面の強化，つまり日本人の理解者づくりの活動（開発教育的プログラム）は，とくに試行されていくと予想される。

また，外国人労働者の受け入れ枠の拡大，あるいは留学生や海外ビジネスマンの増大によって，人口流入・流出が活性化してくると，定住者に対する日本人の態度も次第に柔軟性を帯びてくるはずだ。同化を迫ったり，排他的であったり，無視したりという時代に別れを告げ，いわゆる「共生」を語るだけではなく，それを積極的に行動しはじめる時代を迎えるだろう。楽観主義的な予想だが，そう願わずにはいられない世紀末，「有終の美」を飾って2000年に突入したいものだ。

仲良く遊ぶラオスの子供たち

在日韓国・朝鮮人の現状を知れば 定住難民の未来が見えてくる？

この差別をどう，思いますか？

在日韓国・朝鮮人に対する差別を考える前に，次の中国在留日本人孤児二世の証言を聞いてほしい。

「小学校のとき，いきなり『日本人は日本に帰れ』とか，いきなりパンチされたり，ほとんど毎日泣いていた。友だちもいなかったから，誰もかばってくれなかった。家の近所でも『日本人，日本人』とかいってからかわれた。だから，学校にも行きたくないと思った」

「『ニホン人，ニホン人帰れっ』といじめている中国人の側に立たされ『お前は日本人ではないよな』といわれて黙っている。そして一緒になっていじめていることもある。…自分がいやで吐き気がする。いつみんなにバレるか，落ち着かなくなる」

「日本人が中国国籍を取るには，帰化後の名前をどうするかも重要なこととされている。つい最近までは，中国式の苗字名前でなければ認められなかった」

つぎは日本人孤児二世と結婚した中国人女性と，その夫（孤児二世）の証言です。

「19のときだからねえ，いっしょになったのは。そのときはね，もうどうでもいいや，何とかなるだろうってな感じ。でもやっぱ，最初の3年間というのは，あたしの実家に電話しても切られたのね」「（義弟の結婚式のときも）今回はちょっと遠慮してくれってね。親せきとかいろいろ来るから，日本人はまずいってわけなんだ」

どう思いますか？　この差別に。

もう，お気付きのとおり，上の証言は在日韓国・朝鮮人に対する日本人の差別なのです。差別をする側というのは，される側の痛みには，往々にして鈍感なものです。そこで，ちょっと言葉を入れ替えてみました。日本→朝鮮，中国→日本と置き換えて読みかえしてみてください。

このような差別が，親も日本で生まれ育った在日韓国・朝鮮人に対して行なわれているのです。しかも，一応は自分の意志で中国へ行った日本人の孤児と違い，来たくもない日本に連れてこられたり，来ざるをえない人たちの子孫に対してです。

この事実に，驚いた若い読者も少なくないでしょう。東南アジアからの新しい定住者もやがて直面するであろう，顔も言葉も同じ人たちに対する差別の現状について，川崎市ふれあい館の裵重度（ペエ・チュンド）副館長にお話を伺いました。最初にあげた実例も裵さんにいただいた『ともに』（企画発行/神奈川県渉外部国際交流課）によりました。(AG)

これから生まれてくる子の永住は保証されていない

――最初に法律的な差別について教えてください。

「まず，問題なのは永住権です。厳密に言うと難しいのですが，敗戦以前から継続して日本に住んでいる人，その子孫には永住許可が認められています。ただし，大韓民国籍の場合（協定永住の3代目），朝鮮民主主義人民共和国籍を希望する者の場合（特例永住の3代目）に対する処遇は，まだ決まっていません。韓日（日韓）条約によると，1991年までに協議することになっています」

―― これから生まれてくる子どもたちの未来に不安があるわけなんですね。

「そうです。また，永住許可は基本的には“再入国許可”をとらずに出ると失われます。ですから，日本国外に出る前に必ず“再入国許可”を取っておく必要があります。現在は認められているのですが以前は“指紋押捺”（後述）を拒否している者には許可を出さない，ということもありました。また，一定以上の刑事罰が確定すると強制退去させられることもあります」

――日本語しかしゃべれない人を，ですか？

「はい。しかし，必ずしも厳密に運用できない事情があるようです」

―― そのほかには？

「国，地方とも選挙権がありません。日本で生活し，税金を納めているのに……。北欧諸国では地方自治体の被選挙権もあり，外国籍のまま地方議会の議員をしている人もいるようですが，日本では認められる気配もありません。

それから基本的なことですが，日本人は住民基本台帳法，戸籍法によって，在日韓国・朝鮮人は外国人登録法によって，存在が位置付けられています。このふたつはまず，立法の趣旨が違います。前者は「住民の利便を増進」するに対して，後者は「公正な管理」が目標です。“外国人登録法”では職業，勤務先，顔写真，指紋の記載と“常時携帯と呈示”が

義務付けられています。それに，違反したときの罰則も重く，５年ごとに更新する必要もあります」

難民条約の批准で獲得された基本的権利

── そうですか。一時大問題になった指紋押捺の問題は，その後どうなりましたか？

「まず，外国人登録法が改正になり，これまでは５年ごとに，指紋を押す必要があったものが，最初の一度でよくなりました。問題は16歳になって外国人登録証にはじめて指紋がとられ，その時押すか，拒否するかです。これを拒否している人もいくらかいるのですが，今後制度がどう変えられていくのか注目されるところです。」

── 欧米系も騒ぎ始めたので，黙認というわけですか。国民年金など外国人の権利についてはいかがですか？

「国籍条項（日本人でなければダメという明文）での差別と，運用上の差別とか詳しく話すと難しいのですが……，大雑把な話をしましょう。

社会保険，生活保護，被雇用者年金（厚生年金，農林年金など）に関しては，早くからだいたい認められていました。ただ，生活保護に関しては外国人には「異議の申し立て」ができない，という差別がいまでもあります。国民年金と住宅・児童手当などに関するさまざまな権利は，国連の人権規約（79年），難民条約（82年）の批准によって獲得されました。

ところで韓日条約の締結は65年です。本来なら特別に因縁があり，当該の国民の福祉に有効であるはずの二国間条約ではなく，国際諸条約という包括的なもので，ほかの外国人と一緒に認められたことには，ある種の感懐があります」

── 難民条約に関しては，国連での議決は1951年で，批准するまでずいぶん時間がかかっていますね。

「そうですね。これは我々の永年の運動の成果であると同時に，在日韓国・朝鮮人への「同化政策」に対する日本政府の自信，それに日本経済にそれだけの余裕ができたということもあるでしょう」

── 82年というのは日本が国際的非難をあび，定住難民を入国させ始めたころですから，その影響もあったのかも知れませんね。

「そうですね。差別が厳然と残っている分野が，軍人恩給など，戦争犠牲者に対する援護法です。日本政府は韓日条約によって解決済みといいますが，在日韓国・朝鮮人は，何の補償も受けていません」

── 一方的に徴兵しておきながら（後述），ひどい話ですね。

陰湿に行なわれる就職差別

「法律的差別に準ずる問題に，教育の問題があります。日本の公教育は，外国人児童の存在を意識していません。義務教育といいますが，子どもに教育を受けさせる義務を持っているのは日本人の親だけで外国人にはありません。ですから，在日韓国・朝鮮人の子どものところには就学を指示する文書がきません。“希望して入れてもらう”のです」

── となれば，教育の内容も……。

「はい。民族として生きていく教育，たとえば韓国・朝鮮語を教えたり，自分の歴史として半島の歴史をカリキュラム化して教えることは禁止されています。日本人としての教育はあっても，在日韓国・朝鮮人としての教育をしてはいけないというのです。また民族学校の増設は一切認めないのが政府の公式の方針です」

── 次に就職差別の話を教えてください。

「まず，公務員ですが，以前はあらゆる職場から，ほぼ締め出されました。現在は，個人の強い意志と広範な人々の支援の結果，それと好景気による求人難もあって，現業（水道，清掃など）では徐々に採用されてきています。外務，警察などは法令で日本人でなければならないと定められていますが，そのほかは，ほとんど運用，つまり法律的な明確な根拠がないまま外国人は排除されています。現在は一部の地方自治体で一般職の採用が見られますが，国，県，政令指定都市では皆無といっていいでしょう」

── 困ったものですね。

「国による差別，締めだしがどんなふうに行われているか，その縮図のような差別がいくつかあります。たとえば，教員免許は差別なく取れるのですが自治体での採用はほとんどありません。また司法試験の受験資格はあるのですが，実務につくために義務とされている司法研修所に入所できるのは原則として日本人だけで，在日韓国・朝鮮人の場合「帰化」することをつよく要請されます。この壁を突破した人で韓国籍のまま弁護士になった人がいます。以降何人かの人が続いています。判事や検事には国籍条項があるのでなれません」

── 陰湿なやり方ですね。

「このような傾向は帰化の認可にもあります。帰化には，①経済的に自立している，②素行が善良である，③日本国にとって不利益にならない，の３つの

条件が法律にあるのですが，基準が明らかにされていません。一番問題になるのが帰化後の名前です。民族名（韓国・朝鮮式の名前），を選ぶと，まず不許可でした。そのうえ，不許可の理由は一切明示されません。毎年，１万５千人あまりが申請し，５千人程度が認められているようです。少しずつ少しずつ混ぜていこうというのでしょうか？」

――話をもとに戻して就職差別の件ですが，民間ではいかがですか？

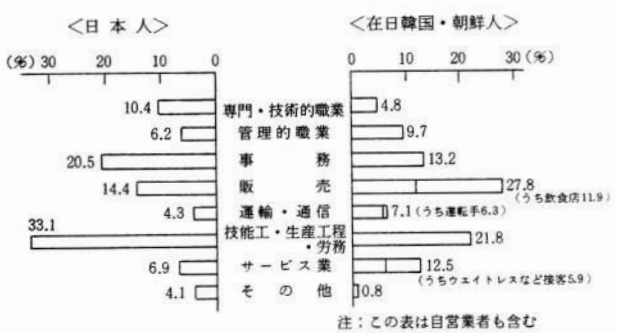
「受験させないとか，内定取り消しなどといった明らかな差別があれば，対応の仕方があるのですが，受けさせておいて不合格にされると，はっきりしたものはでてきません。ただ，日立製作所の内定取り消し事件（70年）などをみると，まだまだ根強くあるようです。厳密な比較はできないのですが日本人と在日韓国・朝鮮人の職業別就業者数を比べてみると，推測できると思います」（別表１）

差別によって，人の心はなぜ傷つくのか？

――さて，一般の人間の感情的差別に関しては，この項の最初の証言を見ていただくとして，このような差別がいかに人の心を傷つけるのか，在日韓国・朝鮮人の側の意識について教えてください。

「たとえば，いじめられるために在日韓国・朝鮮人であることを隠そうとすると，バレやしないかと，いつもびくびくしていなければなりません。さらに日本人になりきろうとすると，人生の節目節目の差別で日本人ではないことを思い知らされます。こういった，歪みは人格形成の上で障害になります。もっと進んで，自分が韓国・朝鮮人であることを否定するようになると，自分を生んでくれた親，さらには祖国の歴史，文化を嫌悪するようになります」

――悲しいことですね。



注：この表は自営業者も含む

職業別就業者

「私たちは胸をはって，自分の民族名を言えるような，主体性と社会を作りたいと思っています。たしかに，在日３世などで社会的名声と経済力をえた人の中には，出自にまったくこだわらない人もいるようです。しかし，悩んだり苦しんだりしたときに，自分の存在まで立ち返って考えるのが人間です。ですから，帰化して生きるにしても，韓国・朝鮮人として生きるにしても，自主的な判断で堂々と生きられる社会になってほしいのです」

なぜこんなに多数の在日韓国・朝鮮人がいるのか？

最後に裵さんのレポートにしたがって，在日韓国・朝鮮人の歴史的経過についてまとめておきます。明治時代初期は（李氏）朝鮮が鎖国政策があり，両国の国民が相手国に住む例はほとんどありませんでした。1905年の日韓保護条約の締結，1909年の日韓併合は，日清日露に戦勝した日本が，朝鮮に押し付けたもの，つまり侵略です。以後，農民を中心とした日本人の朝鮮移民が急増し1915年には30万人を超えました（同年の在日朝鮮人は４千人弱）

1922年に渡航調節制度がなくなると，耕地を日本人移民に奪われた朝鮮人農民などが，日本内の肉体労働につくために移住し始めます。満州事変（1931年）から日華事変（1937年）にかけては，その数が増します（約30万人→70万人）。さらに，日華事変が拡大し国民総動員令が出されると，朝鮮の人たちを戦争に巻き込んでいきます。最初志願兵だったものが徴兵に変わり，労働者の強制連行も増えます。悪名の高い創氏改名を押し付けたり，従軍慰安婦の名前で朝鮮の婦人を戦地に送ったのも，この時代です。

これらの結果，終戦時には2,365,263人が在日し374,944人が軍人，軍属になっていました。このうち約６万の強制連行者が死亡し，約15万人の軍隊関係者が死亡または行方不明といわれます。さらに，戦犯に問われた者147人（うち死刑22人），広島・長崎で被爆した者７～10万人（４～５万人が死亡）と，大きな戦争被害を受けています。

終戦後，ただちに帰還が始まりましたが，半島の混乱と疾病の流行，生活基盤などの問題で約60万人が日本にとどまりました。これに対する日本政府の対応は，当時の外相（のち首相）吉田茂の，「朝鮮人に食わせる食糧はない」発言に代表されるように，歴史的な経緯を無視し

戦後の在日韓国・朝鮮人数は約15万の帰化者を別にすると，60万人前後を推移しています。

ノイくんがんばる！

岩崎美佐子

夜，9時をまわってから電話が鳴った。

「みさこさんいますか」「はい，私です」「僕はスパチャイです」「えっ，だれ？」「ノイです」「ええっ，ノイ，ノイだって？」「タイ語で話してもいいですか？」「ダイ　カ」。この日，ノイからの電話は，出稼ぎ仲間の状況，名古屋の笹島で会った日本人労働者の印象など，30分以上も続いた。

ノイは，1987年11月から88年3月まで，短い期間ではあるけれど，JVCタイの地域開発チームのスタッフとして働いた。根っから子供好きで，JVCのスタッフになる以前から，JVCの特別活動を何度も手伝ってくれていた。しかし，正式にスタッフとなってみると，ノイは自分のしたいこととの間にズレを見い出したようだ。JVCの活動方針が，時間をかけて住民の悩みを聞き，スラムの生活全体を改善することにあるのに対して，ノイは子供と一緒に身体を動かして，人形劇をしたり，遊んだりするのが好きだった。年間のプログラムを自分でたて，それを達成していくことが，ノイには気が重かったようだ。結局，自分をよりいかせる，子供を対象に活動しているNGOに職変えをした。

そのノイが日本に出稼ぎに来ていると聞いたのは，1989年の5月頃だった。NGOにかかわる人は，お金儲けを至上としない，もうひとつの生き方をさぐろうとしている人だという思いがある。それなのにノイがお金儲けに日本にやってきた。はっきり言って，あまりいい気持はしなかった。ノイからの手紙に，日本での月収額が書いてあったことから，ノイを知るスラムの人たちの一部は，なんとかして日本へ行きたいと浮き足だっているとも聞いた。

そんな私の気持を察していたのか，ノイはまず，日本に来ているNGO関係者は彼だけではなく，ほかにも6，7人いることから話をはじめた。NGOとして活動するにも，資本があればもっといろんなことができるとノイは言う。お金があれば勉強もできる。彼の友だちの一人は，日本で貯めた資金で，現在ヨーロッパに留学中だそうだ。

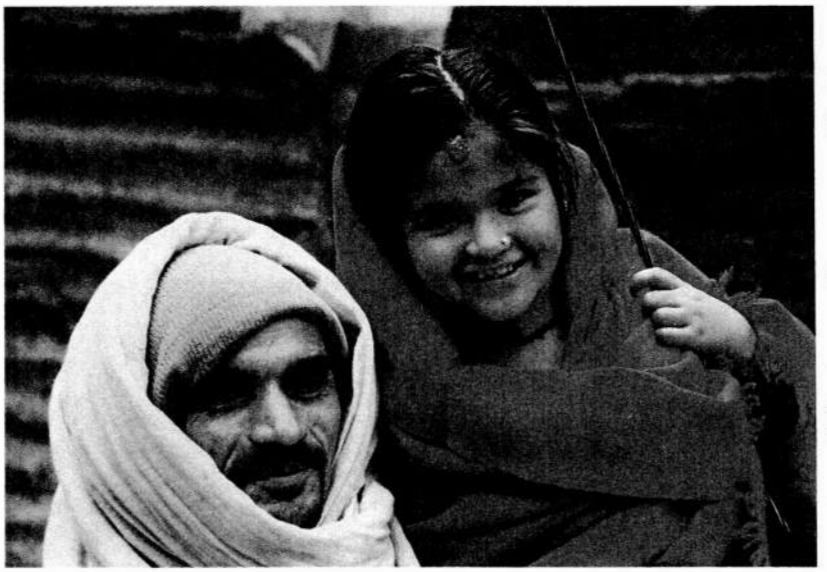
話を聞いてみると，ノイの出稼ぎの動機は，日本人がある目的のためにアルバイトをするのと同じようだ。日本人であれば，アルバイトはいつでも何度でもできる。しかし，いずれは不法滞在で強制送還となる身のノイには，パスポートを偽造しない限り，チャンスはたった一度しかない。

彼は，日本へ来るとすぐに友だちを頼って機械部品製造工場で働きはじめた。仕事は9時から6時まで。土曜日も働いて，月収は30万円になる。下宿は工場から歩いて2分のところにあり，同じ職場で働くタイ人の友だちと同居している。食事は朝昼晩自炊。騙されたこともなければ，辛いこともない。あと2，3年は働くつもりだ。明るく，人なつっこい性格が幸いしているのか，ノイは困っていることはなにもないと言った。

私がこれまでかかわったタイ人労働者のなかで，ノイは最もスマートにやっている例だ。反対に，最も悲惨な例はオイだった。近所に住む女性から，日本に月収150万円の女中の口があると勧誘され，成田についたとたん出迎えた男たちに監禁された。男たちの顔ぶれは何度も代り，常時2，3人に監視され，売春を強要され，拒否すると熱いアイロンを足にあてられた。長時間車に乗せられて移動したので，どの町にいたかもわからない。ある日，車で移動中，スキをみて逃げ出し，一晩走って走って，夜明けの舗道を歩いているところを保護された。私が通訳として呼び出され，日曜日の閑散とした警察署で会ったとき，おびえたオイは泣いてばかりいた。我家に一泊することになり，シャワーを浴びて足の火傷の手当をすると，オイは安心しきってぐっすり眠った。なにも知らないで騙されて来るタイ人がもどかしい。警察署で女中で月収150万円と聞いたとき，私は思わず「150万円じゃなくて，15万円じゃないの？」と聞き直した。女中月収150万円を信じ，パスポートの名前は源氏名だと教えられ，成田に着いたらパスポートは出迎えの人にあずけるものだと思って来るなんて，あまりにも世間知らず過ぎるじゃないか。ほかの国からの出稼ぎ労働者に比べて，どうも騙されやすいタイ人出稼ぎ労働者のなかにあって，ノイは，「よくぞやった」と拍手喝采ものなのかもしれない。

第2回 JVCフォトコンテスト　第3世界の人々

選評：フォトジャーナリスト
野中章弘



第1位
親子
（カトマンズの市場にて）
撮影　有泉はるひ

写真のうまさでは群を抜いていました。ただ漫然とレンズを向けるのではなく，かなり意識して写真を撮っていこうとする姿勢が感じられます。正面から被写体と向き合い，被写体に肉薄していこうとする迫力もあります。これからが楽しみです。

第2位
市場の母子（ベトナムにて）
撮影　金子二三子

母子の笑顔が文句なしに素晴らしい。国家の再建に向けて新しい一歩を踏み出そうとするベトナムの希望を象徴するような笑顔です。まだまだ暗いニュースが多いインドシナですが，優しく，そしてしたたかに生きるベトナムの人々の明るい表情に救われる思いがしました。

第2位
カンボジア難民の親子
（タイ・パナニコムキャンプにて）
撮影　久津輪　雅

ハンモックの中で気持ちよさそうな赤ん坊とお父さん。とても穏やかでいい表情をしています。このような写真は，被写体との間に一定の信頼関係がないと撮れるものではありません。その意味でもとてもいい写真だと思います。

第3位
子供たち

（タイ・パナニコムキャンプにて）

撮影　**熊沢　ゆり**

JVC日本語学校を遊び場にしていたラオスの子供たち。それぞれ表情が個性的で，とても可愛く撮れています。祖国を離れて第3国に定住しても，この笑顔を忘れず，たくましく生きて欲しいものです。

第3位
ゴム園で働く子供

（マレーシアにて）

撮影　**樫田　秀樹**

第三世界では多くの子供たちが，学校に行く機会を奪われています。8歳だというこの少年も，学校に行けたのは1年だけ。今は毎日ゴム園で働いているそうです。そんな現実をなんとか変えていきたい，と願う作者の思いがこもった一枚です。

第3位
少女

（フィリピン・ミンダナオ島にて）

撮影　**水野　泉**

ゴミの中から売れるものを拾い集める少女。しかし，このような境遇にあっても明るさを失わない彼女の笑顔は，私たちの心を動かすものがあります。「頑張って！」と声をかけたくなるような写真です。

特別賞

近くて遠いタイ（右上）
メコン川の向こうはタイ（右中）
（ラオスにて）
撮影　**岩崎美佐子**

2枚とも暖かくて詩心あふれる作品です。被写体との距離感もしっかりしていて，物を見る作者の眼の確かさを感じます。一般のコンテストなら1位に推すところです。ただ今回はJVC主催ということで，被写体となった人々とのかかわりに重点をおいて審査しました。そこで特別賞とさせていただきました。

記録賞

カンポット市の昼下がり
（カンボジアにて）
撮影　**林　達雄**

記録するということは，写真の持つ大切な特性です。私たちの生きている世界にいま何が起きているのか，それを記録しようとする精神はとても大事なものです。特にJVCの活動現場にいる人たちは，歴史の目撃者であり証言者でもあります。これからも「記録する精神」を大いに発揮して欲しいと思います。

佳作

結婚祝いの舞い
（ソマリア）
撮影　鴇田　三芳

アンボックつきの季節（カンボジア）
撮影　古西　勇

朝食前のお祈り（タイ）
撮影　柏　巌

子供と水牛（ラオスにて）
撮影　原田恵津子

選評

JVCのコンテストらしく，人の表情を生き生きととらえた写真が多かった。ただ，JVCの活動を写した写真がほとんどなかったのは意外です。現地での生活ぶりなどをもう少し知りたいような気がします。

選考にあたっては，撮る人のメッセージが強く感じられる写真を中心に選びました。表現したいという意思の感じられない写真は，いくら技術的に優れていてもつまらないものです。何を撮りたくて今シャッターを押すのか，ということをファインダーを覗いた時にちょっと考える習慣をつけると写真がグッとよくなると思います。次回の応募を期待しています。

野中章弘

エチオピア、再び飢餓に

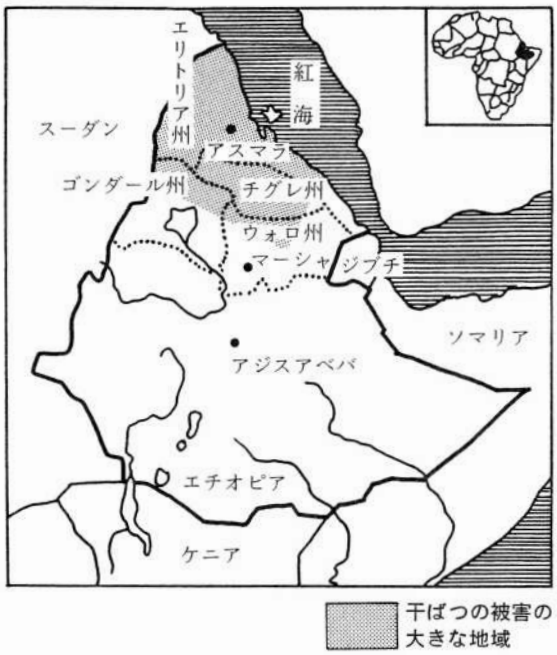
江原 浩昭・広美

1989年12月，エチオピアの北部，紅海に面しているエリトリアの州都アスマラへ向かう飛行機の眼下には，乾期の，茶色に乾いた大地が広がっていた。アスマラに近ずき，高度が下がるにしたがって，その景観はより凄まじいものに変わっていく。標高3000メートルのアビシニア高原には木の姿が点々と見えるだけで，その僅かに残っている木でさえ，周りの大地に溶け込み，風化している。例年であればこの時期には，山の上まで耕された畑の実りや収穫風景が，見えるはずであるが，今年は，畑で働く人の気配さえ伝わってこない。

飢餓と内戦の間で

1990年，エチオピアを飢餓が襲いつつある。昨年10月，WFP（国連世界食糧計画）はエリトリア，チグレを中心に400万人が飢えるとし，世界に向けて緊急食糧援助のアピールを出した。WFPのアピールに続いて，エチオピア政府の救援組織であるRRC（救援復興委員会）は，WFPよりも200万以上少ない185万という数字を発表した。数年ごとに襲う飢餓に対して，エチオピア政府は「早期警報システム」という，飢餓の早期予知，予防の組織を作っている。各地域のRRC事務所が，その年の雨量，作物の収穫量を調査し，飢餓の危険のある地域に対して早急に食糧援助を行うものである。それではどうして,WFPとRRCの間で200万の違いがおこるのだろうか。

エリトリア州，チグレ州には，それぞれ，20数年前からゲリラ活動を行っている解放戦線がある。EPLF（エリトリア解放戦線）は，エチオピアからの分離，独立を目指し，TPLF（チグレ解放戦線）は，現政権の打倒を掲げている。EPLFとエチオピア政府の間では，少し前から和平交渉が進められてきたが，TPLFはその交渉に参加できなかった。そのため，昨年9月のエチオピア新年の頃からゲリラ活動を活発化し，マーシャ村のあるウォロ州の大部分をも支配下に置き，政府軍との間で激しい戦闘を繰り返している。このような状況のなかで，緊急食糧援助が可能な地域は，エリトリア州では，エチオピア政府が管轄下においているわずかな面積に限られ，チグレ州には全く不可能な状態が続いている。しかし，チグレ州の飢えは確実に広がっている。隣国スーダンよりチグレ州に入った英国放送の記者は，干ばつのひどさを報告し，現在のままの状況が続けば，数十万の命が失われると伝えてきた。エチオピア政府とWFPの数字の違いは，このチグレの人々を含むかどうかである。内戦と飢餓の間で，200万人の命が意図的に忘れ去られようとしている。



岩が露出し，表土がない（エリトリア州）

エリトリアでの救援活動

エチオピア政府軍は，エリトリアの州都アスマラを中心に，半径およそ150キロだけを支配下においている。アスマラ周辺を除いたエリトリア州はすべ

JRPの配給センターに集まる人々（エリトリア州）

配給センターの近くで小屋を作る（エリトリア州）

てEPLFの支配下にあるのだ。エリトリア州の干ばつの状況を自分の目で確かめるため，私たちはアスマラ周辺で30ケ所の食糧配給センターを持ち，緊急援助を行っているJRP（５つのキリスト教系の団体が組織しているJoint Relief Partnershipの略）というNGOを訪れた。午前９時以降でないとアスマラの町を出ることができず，また，午後４時迄に戻らないといけないという制約があるため，かなり，あわただしい行程を組まざるをえない。JRPが用意してくれた四輪駆動車は，戦車が痛めつけた狭い山道を，配給所目指して疾走した。10キロごとに軍の検問があり，道路わきの山の上には数人の兵士が銃を構え，周りを見張っている。戦争の最前線へ向かう緊張感が走った。このあたりは標高2500メートルの高地，農業省の植林区域が多く見られるが，生き残っている木はほんの僅かにすぎない。時々目に入る緑色は，川の近くにあって灌漑している畑か，ユーカリ植林地である。少し低地へと下っていくと，水の流れが消え，川には真っ白な砂が広がるばかり，周りの山は岩が露出してしまっている。

JRPの食糧配給は，昨年末まではチグレ州やEPLFが支配している地域から，食糧を求めてやってきた人たちだけを対象にしていた。彼らは干ばつで食べるものが無くなり，食糧を求めて配給センターに出てきたものの，内戦のために自分の村に帰れなくなってしまっていた。あてがわれたテントや，自分たちで作った小屋などに寝泊りし，決められた日に，１人当たり，月に，12.5kgの小麦，1kgの粉ミルク，0.9kgの食用油の配給を受けるために，ラクダやラバを連れて配給所へ来る。彼らは，配給される食糧のみで生きており，内戦が解決されないかぎり，自分たちで食べるものを生産する術はない。これら国内難民に限定されていた食糧配給は，今年に入って飢餓が広がっていることから，配給所周辺の農民に対しても行われるようになった。しかし，食糧配給が可能な地域は，エチオピア政府の支配下にある地域に限定されている。EPLFの支配しているエリトリア西部に住む人々は，どのように生き伸びることができるのであろうか。JRPやRRCによってカバーされるのは，エリトリア州の人口の約半数でしかない。チグレ州の人々，約250万人に対する援助は，現在に至っても全く開始の見通しがたっていない。

飢　餓

エチオピアの話をすると，「食糧の自給率はどのぐらいですか」という質問をよく受ける。JVCの食糧配給が始まるまえのマーシャ村周辺の状態を考えると，100％と答えるしかない。要するに，ある物を食いつなぐ以外，生きる方法がないのである。食糧の貯蔵が少なくなれば，人は３度の食事を２度に切り詰め，１度の量を半分にして，つぎの収穫を待つ。収穫を待てないときは肉用・農耕用の家畜を手放し，すべてを失ったときから飢えがはじまる。

マーシャ村周辺では，昨年の小雨季の後半に雨が不足し，作物への影響が心配されていた。この頃，老人が数人，相次いでJVCに保護を求めて来た。雨不足を危惧した農民が，貯蔵食糧を節約しはじめた影響が，老人たちにしわよせとなって現われたのであろう。残り少ない食糧が，自分の家族や，労働に従事する人に優先的に保存されるとき，生産手段を持たない老人や身寄りのない人々は，まっさきに共同体から弾き出されてしまう。

昨年の４月，私たちはマーシャ村から10キロほど離れたアダグイヤ地域で，５歳以下の子供の栄養状態を調査した。人口約3,500人のこの地域で，約600人の子供の身長・体重を計測して，WHOが定めた成長曲線と比較してみたところ，過半数の子供が標準の80％未満，うち22人は60％に満たないという結

果が出た。マーシャ村周辺でも調査を進めるとともに，栄養失調児を持つ母親への教育活動と，重症児に対するミルクと補助栄養食の配給を続けてきた。しかし，調査はマーシャとアダグイヤを結ぶ，人の往来が比較的多く，クリニックも近い，道路沿いの地域が終わったところで中断せざるをえなくなった。交通の不便なほかの地域では，さらに多くの栄養失調児が存在することが予測される。

干ばつが起こり，食糧が不足してくると，最初に被害を受けるのは，このように，老人であり，子供である。一昨年は雨に恵まれ，平年並以上の収穫があったというのに，わずか半年後にはもう飢餓に見舞われる。彼らの生活は，食糧生産高，栄養摂取量ともに，ぎりぎりの線上に成り立っており，バランスの崩れは，あっというまに死につながる。

こうした村人の生活苦に，租税制度や土地制度，徴兵制度がさらに追い撃ちをかける。ある老人は，農民組合に税金を払うため，2頭しかいなかった牛の1頭を売った。ところが耕起には牛が2頭必要だ。そのため，彼は畑を耕すたびにお金を払ってほかの人から牛を借りなければならなくなってしまった。老人の災難はそれだけで終わらなかった。農民組合は，彼が老人であることを理由に，彼の所有地を，斜面の下方の豊かな土地から上方の痩せた土地に替えてしまった。土地はすべて国有，村人は家族構成に見合った土地を借り受ける制度をとっているエチオピアにあって，土地への労働投入の努力は一瞬にして無に帰す。これでは，村人に土地への愛着を期待する方が無理というものだ。老人のものだった豊かな土地は，今は農民組合の役員のひとりが所有している。

干ばつになっても，すべての人々が平等に飢えに直面するわけではない。乏しい条件をわかち合わなければならない状況のなか，弱者と強者の関係は，より鮮明に見えてくる。

JVCの対応

今回の北部の干ばつに関して，JVCはかなり早い段階から関連団体への働きかけを行ってきた。WFP，RRCやNGOから情報を集め，エリトリア州で活動をしているJRPの配給センターを訪れた。それを踏まえて在エチオピア日本大使館や日本の外務省，マスコミなどに緊急アピールをしつつ，緊急食糧援助の方法を探ってきた。アスマラに外国人が滞在できるのは2週間以内であり，アスマラからエリトリア州の他の地域への行動もかなりの制約を受ける。このような状況の中ではあるが，緊急援助された小麦や粉ミルクがどのように使われているのか，本当に，必要としている人たちに届いているのかを追跡し，報告することは，援助をより正確に，かつ迅速に行う意味でも必要不可欠である。そのためJVCは，アスマラに事務所を構え，エチオピア人のスタッフを常駐させ，モニター活動をエリトリア内で行おうと準備している。そうすれば，やがてチグレ州への道路が開いたとき，チグレ内での緊急食糧援助を早急に展開することができる。

これまで継続してきた，マーシャ村における総合開発復興プロジェクトは，干ばつに対して非常にもろい生態系や社会環境の回復と，農民が自らの意思と力によって，その厳しい環境の中で自立していくことを目的としているため，長い将来を見通して，対応していく必要がある。歩みはゆっくりだが，活動地域は次第に広がり，やっと評価に耐え得るだけの規模に達したところでもある。JVCがマーシャに入ったことによって，どのような変化が村の中で起き，どのような影響が村にあったのか，また，生態系の回復は本当に進んでいるのか，といったことを調査しなおし，今後の方向を考えていかねばならない。そのことが，今後のエチオピアにおけるJVCの活動を，より実りのあるものにしていく。

終わりに

内線が激化してきて以来，アジスアベバの住民達は町中での徴兵などにより，緊張感を増大させてきていた。しかし，クーデターの噂が広がり，ウォロ州での戦闘が開始された時期に，灯油を買う長い行列が出来たとき以外は，アジスアベバの町では物が絶えることが無かった。そのかげで，地方の町からは灯油や食べ物が消え，アジスアベバを支えている。エチオピア南部には，肥沃な土地が広がり，豊富な木が育っている。その肥沃な土地ではコーヒーが栽培され，輸出用としてヨーロッパや日本へと送られる。飢餓で苦しむ400万の人々。弱い者が自立していけるまでは，まだ多くの命が犠牲にならねばならない。

エイズ最前線　●タイの場合●

米兵上陸

刺すような日差しのなか，中年の女性が米兵に呼びかけていた。「コンドームを忘れないでね」

タイ・バンコクから車で二時間半，観光都市パタヤ。ちょうど米第七艦隊の米兵が朝から続々と上陸していた。ここにあるのはバーとホテル。R&R（休養と娯楽）の兵士で満員の木造船が，沖の軍艦から数分おきに白い砂浜に乗り上げる。ヤシの木陰には鈴なりになって客を待つ女性たち。

タイエイズ協会代表のソマトラ・トロイさん（54）がエイズ感染防止を米兵に呼びかけたのは，この日が2回目。彼女は28年間米国に住み，シカゴの病院で看護婦をしていた。5年前，同性愛の男性エイズ患者から「僕の恋人はタイ人でした」と告白されショックを受けた。さらに1986年，観光キャンペーンのため訪米したタイ観光局の職員らがエイズの存在を否定したことに疑いを持った。

当時，米国には4万人近いエイズ患者がいた。「一刻も早く手を打たなければタイも……」。彼女は翌年の4月，夫と3人の子を米国に残し祖国に戻った。

昨年，世界保健機関（WHO）は初めてタイのエイズ患者，感染者数を発表した。1987年末に193人だったのが，昨年末には70倍増の13,492人。世界に例のない急増だ。「政府が外貨の稼ぎ頭である観光産業を保護するため，エイズの存在を隠していたんです」。トロイさんは憤る。

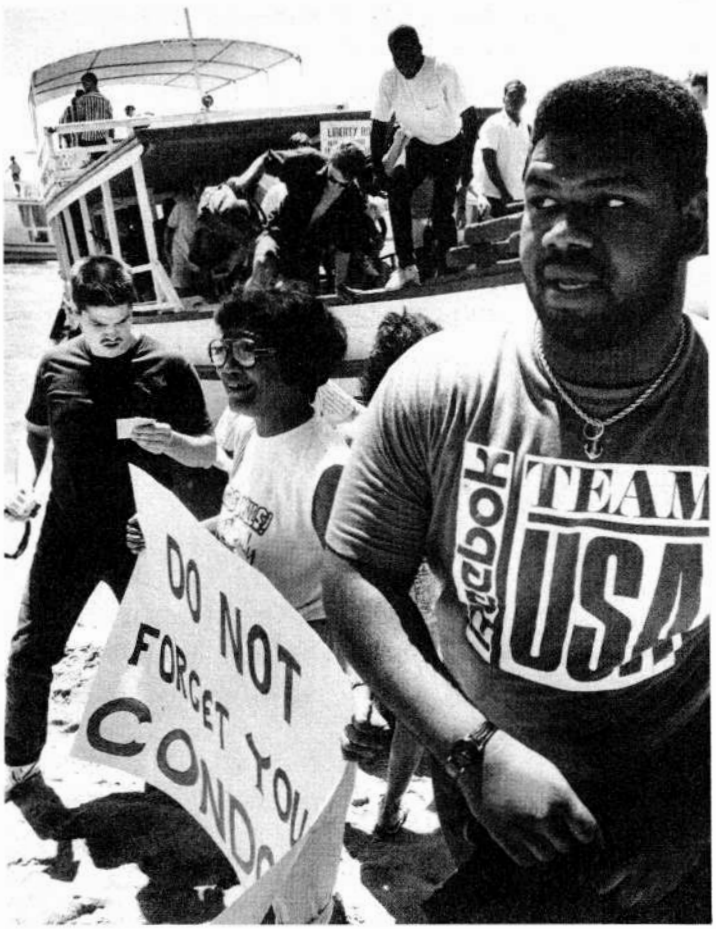
Tシャツに半ズボン姿で降り立った米兵たちは，トロイさんの忠告をおせっかいと言わんばかりに娘たちと腕を組み，街の中へ消えて行った。

1人の青年兵は言う。「船では大きな箱にコンドームがごっそり入れてあって，持って下船するよう勧めているんだ。無料さ。僕も6，7個もらって来たよ，ほら。だからダイジョブ」

彼は空母ミッドウェーの2等機関士。日本語は母港の横須賀や佐世保で覚えたという。

1981年，米国で初めてエイズ患者が発見されて以来，エイズ患者・感染者は欧米，アフリカを中心に急増。

一時のエイズパニックは沈静化したものの，WHOの発表ではタイで爆発的に拡大している。日本を含めエイズ汚染が少ないとされてきたアジアでなぜなのか。その実態と背景を探る。



◀上陸する米兵にエイズ感染防止を呼びかけるトロイさん＝タイ・パタヤで

外国人客の視線の中，踊る若い女性たち
この歓楽街にオフシーズンはない＝バンコク・パッポン通りで

パッポン通り

「オキャクサン！　カワイイコイマス」。一つ覚えの日本語で客引きたちがまとわりつく。バンコクの一大歓楽街，パッポン通り。軒を連ねるゴーゴーバーで若い女性が踊りまくる。

タイはいま雨期で観光はオフシーズン。だが，ドンムアン国際空港の入国審査ブースには，長い行列が何十本もできている。声高な日本語が聞こえた。国家予算の15％以上の外貨を観光で稼ぐタイ。昨年訪れた観光客は約450万人。うち50万人は日本人だった。

一つのデータがある。―昨年チェンマイで7000人を対象としたエイズ調査によると，抗体陽性者は608人。内訳は売春婦267人，輸血者170人，麻薬患者86人，その他85人（チェンマイ保健所調べ）。タイ公衆衛生省の調査でも，過去2年7カ月の患者，感染者の感染経路別増加率は静脈注射による麻薬常用者が2.6倍なのに対し，異性間性交渉が11.4倍と激増している。

パッポン通りで働く女性たちを支援する民間団体「エンパワー」のアピス代表（42）に会った。「英語教室でコンドームの使い方を教えたり，小冊子を配ったりしていますが，要は男の意識が変わらなければ……。エイズ騒ぎで10代前半の売春が増えていますよ」

午後10時半。原色のライトと耳をつんざくビートがうずまく。ゴーゴーバーの店長（27）は「エイズが騒がれだしてからも景気は変わらないね。ウチは客を取った翌日は必ず契約医のところで検査させている。もし陽性が出たら即クビにしますから」。

別のバー。「コンドームをしてくれない客は1割くらいかな。怖いからその分うんと高くしてもらっているの」とプンさん（18）。明日が期限の家賃が足りないと，ひざに乗って来る。パッポン通りの隣，タニヤ通りは，“日本人専用道”。日本式ナイトクラブでは「そうね，8割が連れ出すわね。女の子一人当たり，月に15人くらいかな。性病検査は毎週，エイズのは6カ月ごとにしているわ」。きれいな英語で話すテェウさん（23）は日本で働きたいと言う。

エイズ検査で抗体が見つかるのはウイルスが体に侵入して2～12週間。一般に3カ月たたないと検査意味がないといわれる。「タイでは売春婦が最も移されやすく，最も移しやすい集団です。そして対処が難しいのも彼女たちです」（タイ公衆衛生省）

温　　床

ホテルが点在するバンコクの一角。紫色のイルミネーションがまぶしいほどの光を放っている。バンコクに数多くあるゲイバーの一つ。エイズ感染防止のキャンペーン・ショーが開かれていた。既にゲイらしい若者たちで埋め尽くされている。

司会者が登場した。「エイズってどんな病気か皆さん知ってますね」。エイズとその予防の基礎知識をブラックユーモアを交えて説明する。彼もタイのショービジネス界に生きるゲイ。

配られたパンフレットで顔を隠していたゲイたちの間から笑いが起きる。「さあ，お待たせ。本日のメーンイベント，コンドームの装着競争だよ」。恥ずかしがりながら数人が壇上へ。キュウリや大根などを1本ずつ選び取ったところで「用意，始め！」またたく間に「1番」「2番」とコンドームをかぶせたそれを高々と掲げる。

楽屋と客席を行き来する和服姿の人がいた。レック・マスダさん（38）。タイのゲイバーの草分け「ス

コンドーム装着競争に参加するゲイボーイたち
その表情は明るい＝バンコク市内で

ーパーレック」の経営者でゲイ産業経営者会議の書記長。日系2世だ。

レックさんは言った。「日本ではこんなに明るくは出来ないでしょ。私たちをエイズの“要注意人物”と周囲が見るから，こうしてキャンペーンの先頭に立っているの。だって特定グループへの偏見，差別は彼らを地下に潜らせてしまい，感染防止対策を空回りさせてしまうでしょ」

ヘロイン

バンコク最大のスラム，クロントイ。トタン屋根に照り返す夕日に，彼女の横顔がシルエットをつくる。ショートカットの髪，化粧気のない小麦色の童顔。ノイさん，23歳。左手首のブレスレットの陰にミミズばれが見え隠れする。ヘロインの注射痕だ。

プラティープ財団エイズプロジェクト主任のニッタヤーさん（44）は，ノイさんを気遣いながら口を開いた。「6ケ月前，抗体検査を受けさせて陽性とわかりました。売春をやめさせなければならないのですが，やめても今の彼女に仕事はありません。9歳になる男の子もいるし。とにかく2週間に2ダースずつコンドームを渡して，客に使わせるようこの子には言ってるんです」

ノイさんは「専用の注射器を使っていた。注射が原因じゃない」と言うが……。タイの麻薬常習者40万〜60万人，男性同性愛者は約10万人。もちろん推定で，実態は不明だ。

励まされるノイさん（左）＝バンコク・クロントイスラムで「あなたにはかわいい子がいるでしょう」と、ニッタヤーヤさんに

偏　見

タイでただ1人，エイズ患者であることを実名で報道された人がいる。シャオン・スアスムさん（50）。

工場に囲まれた沼地に建つスアムスさん宅を訪ねた。家にはビニール袋を束ねる内職に追われる妻（43）だけ，夫の姿はなかった。別居しているという。小さな女の子が駆け寄ってきた。7歳の末っ子だ。「学校から帰って来て『名前を変えたい』と泣きましてね。一緒に住んでいたら，他の子が遊んでくれないんです」

夫のアパートに案内してもらう。隣に聞こえることを恐れて，彼は低い声でボソボソと話し出した。「胃が悪くて農業が続けられず，畑を担保に借りた4万バーツ（1バーツは約6円）を持って，8年前バンコクに出て来たんです」

4年前の暮れ，何を食べても吐いてしまい入院，手術を2回受けた。退院して3カ月後，突然職場を訪れた公衆衛生省の役人が採血，その一週間後にエイズと宣告された。手術の時の輸血が原因だった。三年間守衛として勤めていたプラスチック工場はクビになった。

スアムスさんは大学病院の医師の勧めで新聞社に訴えた。1987年5月，バンコクの一般紙は「病院のミス。ハイリスクグループでない人がエイズに」と実名，写真入りで報じた。約6万バーツが寄せられ，一昨年から国立病院の植木に水をやる仕事があっせんされた。

すべてが狂い始めたのは昨年4月。発病し口内炎で何も食べられず，入院してからだ。

「最初のうちは理解をしてくれた人たちも，発病したらガラッと変わって……。来当は一カ月で退院できたんですが，出て来ても戻れるところがないし二カ月いました。病院はエイズ患者でいっぱいで，

久しぶりに会ったスアムスさんと妻子＝タイ・プラッパデーンで

頭をウイルスでやられたのか，大小便をたれ流す末期患者もたくさんいました」。退院後，家には帰らず，このアパートを探したという。

おなかが減ったとむずかる末娘をあやしていた奥さんが口をはさんだ。「この子の上に三人いるんですが，二人は決まりかけていた就職が取り消され，私もやっと見つけたゴム工場を，主人の発病を密告され5日で解雇されました」

いつもカギをかけたこの部屋の住人のことを知る人は，まだこのアパートにはいない。久しぶりに会ったはずの娘は，父親のそばに行こうとしなかった。「どうして主人が……。あの病院に手りゅう弾でも投げ込みたい」

貧　　困

廃材で建てたバラックから弱々しい泣き声が聞こえる。女性がしわだらけの赤ん坊にミルクを飲ませていた。スラム生まれの母親は22歳。2年半前に結婚するまで売春をしていた。夫婦ともヘロイン中毒。二人は昨年初め，エイズの抗体検査で陽性とわかったが，彼女はすでに妊娠5カ月。生まれた男の子はエイズに感染していた。

プラティープ財団麻薬撲滅プロジェクトのパットプイ主任（43）は淡々と説明した。「これまでに146人の麻薬患者を8回に分けて病院へ送りましたが，7回までの130人中104人，8割がエイズに感染していました」。この数字をタイのマスコミに公表した時，公衆衛生省はいい顔をしなかった。昨年4月に送った患者については，検査結果の報告がない。

パットプイさんは言う。「彼らが麻薬をやめる時までエイズは待ってくれない。とにかく注射針を介すエイズ感染を食い止めなければ」

が，スラムの現実が立ちはだかる。「何年後かに発病し死に至るエイズといっても，貧困にあえぎ，明日のことより今日どうして食べようかという人たちには一体どこから手をつけたらいいのかわからない程多い問題の一つに過ぎません」

バンコク市民の五分の一，約130万人がスラムに住む。チュラロンコン大学の調査によると，その85％が月収2000バーツ（1バーツは約6円）以下。

カセサート大学のワンタナ講師（社会学）は「外国資本をタイに誘致するのは，こうした安い労働力です。低賃金でも何とか食べられるよう農産物は低価格に抑えられるから農村経済が疲弊。農民は出稼ぎを余儀なくされ，彼らはまた新たな低賃金労働者となる。悪循環です」と指摘する。

赤ん坊はほ乳瓶をくわえても泣いている。エイズの発症で口の中は傷だらけ。飲めないのだ。プラティープ財団から支給された一カ月分のミルクはほとんど余っている。出生時2900グラムだった小さな命は3日後には2500グラムあるようには見えない。

明日が見えないどん底の生活から，ついにヘロインに手を出した麻薬常用者。外国人観光客の買春の対象となる女性たち。この人たちも急速な経済発展をとげるタイ経済の歯車の一つ一つ。その歯車の間でいま，エイズウイルスが増殖を続ける。

高速道路の高架下に住む出稼ぎの一家。彼らにとっては今日の生活が…… ＝クロントイスラムで

この記事は昨年8月毎日新聞西部本社版朝刊に連載されたもので，
登場人物の年齢は当時のまま，統計数字は最新のものととりかえました。

（文・写真　阿佐部伸一）

JVC NEWS

エチオピア支援バザーを終えて

1月21日(日)，横浜市民防災センターにおいてJVC神奈川が主催し，エチオピア支援バザーを行った。

このバザーの主旨は，30万人〜100万人が死亡したと推定される5年前の大飢餓を踏まえ，迅速に救援活動を行いさえすれば，多くの人々が死に至るような最悪の事態は確実に防げることを多くの人々にアピールし，物があり余る日本において，お歳暮や引出物等の頂き物で家庭に眠っている不用品を提供してもらい，その売上金をエチオピアの飢餓救済のための支援金にしようというもの。

今回は，会場である市民防災センターを無料で提供して下さった市消防局との官民協力のバザーという話題性もあってか，新聞各紙が取り上げてくれたことが一般市民に関心と信頼を与え，大きな反響を呼んだ。

当日は，5,000点もの品物が会場に並び，およそ700人が来場し，売上金は100万円を越えた。また，エチオピアから一時帰国中の江原浩昭・広美夫妻がスライドを交え，このままにしておくとあと半年間で死者は400万人に達するなどと現地の食糧難の実情を訴えられた。

受付の窓口で「大事なお仕事，頑張って下さい」と言葉を残して行かれた方，ひとつひとつ丁寧に包装した中に，スタッフへのメッセージを入れて品物を提供して下さった方，「孫たちのお年玉を役立てて下さい」と現金を送ってきて下さった方，毎日毎日が温かな気持に触れられる作業であった。売上げの額もさることながら，こうした多くの人々の善意がとても嬉しく，終ったときは快い疲れと久々に味わう充実感が残った。

それにしても，いかに今の日本の社会の中で不要の品（お金）が動いていることか。形式だけの古い習慣やしきたりに縛られることなく，そして目に余る流通機構の販売合戦の祭りに踊らされることなく，もっと一人一人が認識を新たにして，賢い消費者になるべきではなかろうかと感じたことでもあった。

（JVC神奈川ボランティア　脇谷勢津子）

手作りケーキのほのぼのバザー　松山

俳句の碑めぐり

チャリティ・ウォーク in 城下町　松山

こんなステキな企画をつくりだしたのは，愛媛県松山市在住の土居陸子さん。彼女は障害児のための学校に勤務するかたわら，地方でJVCや第三世界と，どう関わっていくか模索しています。「私にとって障害児のかかえる問題と第三世界の人々がかかえる問題は同じに見えるんです」という彼女がJVCの活動にかかわりはじめたきっかけは，事務局長の林氏の講演会を聞いたことでした。

三年間の試行錯誤の後，五十崎町の月一度のバザーにJVCとして参加。「バザーにはネットワークを広げることを主眼において参加しています。でも売る物がないので，自分の家の押し入れからいろいろな物を引っぱり出して並べたり，手作りのケーキを売ったりしています。もちろんパネルなども私の手作りです」

昨年の夏には東京のJVCオフィスを訪問。このとき，彼女はこれからの活動に対する確信を持ったようです。「JVCの人たちの顔を見て，こんな人たちがやっているんだなあと思いました。」秋には，エチオピア人スタッフ来日の折に，愛媛県でのコーディネーションを担当。今年1月には，松山で第1回目のJVCオリエンテーションもやりました。チャリティ・ウォークの実行委員も，タイのスタディツアーに参加した増本さんほか4人を巻きこんで上り調子です。「休みができたら，海外の現場を見てきて，それをみんなに伝えたい」と抱負を語る土居さん。地方にいてもやる気さえあれば何かできると力づけられました。（東村）

土居陸子（たかこ）さんの連絡先

〒791－02

愛媛県松山市南梅本882－4

TEL：0899－76－4794（平日21時以降在宅）

●注目！“ちょっといい話”がダブルの交替劇

公認会計士から経理歴20年へ

ＪＶＣの会計係は大企業顔負けの顔触れです。

▶NGOの会計なんて，どうせ小遣い帳とおなじ程度，ザルとはいわないけど片手間仕事，なんて思っている人はありませんか。もし，いたとしたら認識不足。多くの人からの貴重なお金を預かるのですから，いわば要の仕事。よそはいざ知らず，JVCはそれはきちんとしています。その会計係がこのたび交替しました。その交替劇に“ちょっといい話”が２つ。女性雑誌の取材の皆さん，今なら間に合いますよ！（A．G）

なんと公認会計士が電車賃を渡していた！

▶「運がよかったから，３年のときに通っちゃった」と，この3月でJVCを一時離れる加藤志保さんは言いますが，公認会計士の試験（一次と二次）は難関です。本を見ても「司法試験とともに文科系の双璧」と書いてあるはず。平均合格年令は25歳くらい，合格率約５％の狭き門。

公認会計士となれば，収入も超一流サラリーマンをしのぎ……と凄いのです。

▶加藤さん（当時は佐々木さん）が初めてJVCにきたのは，大学を卒業して会計事務所で実務経験を積んでいた頃の話し。仕事が終わってから，JVCの会計を見てくれていたのです。そして，三次試験に合格。さぁ，公認会計士としての生活が始まるというときのことです。

▶JVCにだれか図々しいというか，世の常識に染まっていない人がいて，「ネェ，JVCで働いてみない」といってしまったのです。収入はどうみても3分の1以下，健保，雇用保険などの社会保険はゼロ（今はあります）。魅力といえば，たまに海外出張があるぐらいですが，それもパキスタン航空利用の貧乏旅行……。普通は比較になりません。なのに，加藤さんはウンといってしまったのです。

▶以来，JVCの会計は鉄壁になりました。なにせ大企業の経理課長クラスのひとが，末端の小口現金の受け渡しまでするのですから。

「もったいないと，言われません？」

「よく，言われるけど，そうは思わないわ。いろんなことを見たり聞いたりできておもしろいし，コンピューターやテレックスなども経験できるし……。

私，以前と比べると明るくなったといわれるの。大学時代は勉強ばかりで友だちはいないし，暗かったの。人見知りはするし……。でもいまはね」と明るくなった志保さんは，JVCによく来ていた加藤明彦さんとめでたく結婚。

「あれが一番の収穫？」

「どうかなあ，まだ分からんですよ」

▶結婚して可愛い子どもができても，加藤さんは給料を辞退して頑張ってくれたのですが（母子のためにベビーベッドをリースで置いたJVCもちょっと偉い），しかし，夫君が５年の予定でアムステルダムに転勤ということになっては止むを得ません。この3月で一時JVCを離れることになりました。

まん中の加藤友彦くんは生後10カ月からアンヨもできるオフィスのアイドル。富安廉太郎（左）、加藤志保（右）

定年後の夫婦が席を並べて仕事を……

▶というわけで，会計係の後任が必要になったわけですが，今度は一部上場の超一流会社の経理歴20年というベテランに目を付けた人がいます。目を付けたのは長年募金係を勤める富安さん。付けられたのは営業部長を最後に定年退職した富安さんの旦那さん。その旦那さんがいないときに，事務所で富安夫人に話を聞いてみました。

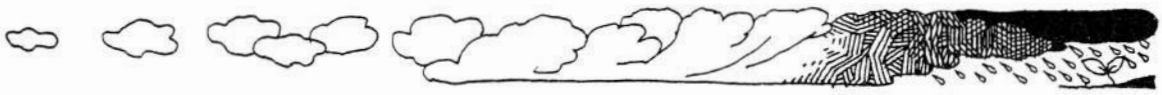
▶「そりゃあ，大変なんですから。明日から，もう行かないと言われたらJVCが困るから，ずいぶん気を使うんですよ。職場ではこちらが先輩だけど，先輩風を吹かすとすねるだろうし……」と嘆いて見せますが，目が笑っています。

「それまでの職場とは全然雰囲気が違うはずなのに，すんなり混ぜてもらって，来るのが楽しそう。うちは息子ばかりでしたから，事務所のみんなが可愛くて仕方ないらしいですよ」

▶ここで，まわりから声がかかりました。「富安さんの旦那さんは，誰でも，きちんと叱るんですよ。普段は事務所全員のお茶を入れてくれたりやさしいんだけど，仕事となると厳しいんだから」

なるほど。これなら，JVCの会計は安心です。それでは富安さん。一言どうぞ。

▶まさか私がボランティアに携わるとは，全く考えていませんでした。家内がJVCに行きだした時，このせちがらい社会で無償奉仕（現在は有給スタッフです）するとは「アホだな」と言ったぐらいです。しかし参加して皆さんに接し，一般民間企業で営利追求している若人よりしっかりしていると思いました。私も仲間に入れて下さい。宜しく。



10周年の記念パーティに集まれ！

このT＆Eが皆さんに届くころには，JVCは設立満十年を迎えています。それを記念して『感謝の夕べ』を開くことは，案内状を送りましたから，ご存じですね。まだ迷っていて出欠の返事を出していない人，“欠席”と出したけど予定が変わって，急に時間ができた人のなかで，次にあてはまる人は，必ず出席してください。きっといいことがありますよ。

◉設立当時や，ずっと以前にJVCに関わったことがあって，今は足が遠ざかっている人➡懐かしい顔が揃います。ぜひ出席して，昔話をしてください。そして，JVCがどう進むべきか“市民の感覚”を教えてください。

◉T＆Eは読んでいるけれど，事務所にもあまり来たことがない人➡JVCの人間がどんなヤツかを知る絶好のチャンスです。ひと揃いしますから，エスニック料理でも食べながら，じっくり観察してください。

◉JVCがどんな活動をしているか，全体像をつかみたいと思っている人➡現地で食べているものが食べられたりしますし，パネルもあります。分かりやすい小冊子もさしあげます。なにより，JVCに集う人を見て，話して，肌で感じてもらうのが一番です。

◉普段ときどきJVCの者に会っているけれど，ゆっくり話す機会がないと思っている人➡ゆっくり，お話しましょう。多少ですが，お酒も用意しています。安上がりな二次会も考えています。

◉一度，海外の現場で働いてみたいと思っている人➡ぜひ，経験者の話を聞いてみてください。タイ，カンボジア，ラオス，エチオピア，ソマリア……。現場活動の経験者がせいぞろいして何でもお答えします。ビルマやアフガニスタン，ベトナム，スーダンなどにも行けるかも知れませんよ。

◉いつも新聞やT＆Eだけで見るあの人の実物を見てみたいと思っている人➡全員が揃うはずです。名札を付けていますから，よく見たうえで，話しかけてみてください。

◉普段はあまり活動できないけど，T＆Eを読むだけでなく，ボランティアをしてみたいと思っている人➡助けてください。当日食事を作ったり，会場を整理してくださる人が不足しています。ただし，この方は当日突然申し出られるのではなく，なるべく早めに，東京事務所の鴇田（ときた）までご連絡ください。

◉上のどれにもあてはまらない人➡私なんか，いいんだって，すねないでください。ひとりでも多くの人がいらっしゃるのを，心からお待ちしているのですから。

▲というわけで，できるだけ多くが，いらっしゃるようにお待ちしております（JVC10周年記念感謝の夕べ実行委員会）

JVCプロジェクト

1990年1月25日現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外，事業計画，資金調達，ボランティア調整，会計，総務，情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会－毎月第1月曜日　午後6時～8時 毎月第2，4土曜日　午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介（代表） 林　達雄（事務局長） 熊岡路矢，星野昌子，前川昌代，鴇田三芳，加藤志保，岩崎美佐子，富安光子，池島千津子，鈴木由子 アイネス・パスカビル
神奈川県 （JVC神奈川）	神奈川県内における渉外，事業計画，情報収集，資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画，運営。		山口誠史，
日本国内	**●定住難民プロジェクト** 1月13日(土)神奈川県立荏田(えだ)高校において，JVCボランティアで教員でもある生地さんが，カンボジア人の高校生2人（ヌットくん，ヒーさん）を招待して，荏田高生と交流会を開催した。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金，ケアハウスさくら苑 チャリティーカレンダー	小野豪大，他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている“さかさま農園”や山武ボランティア協会などと，毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア （ウォロ州）	北部の内戦と飢饉：1985年5月以降，現政権と北部の解放戦線の間の内戦が激化し，ウォロ州を中心に戦闘が続いている。同時にチグレ，エリトリアの2州を中心に飢饉が再来し（収穫が例年の10％），400万人の人々が飢えつつある。現在までに必要な食料100万トンのうち18.5万トンのみしか確保されておらず，このままいけば，多くの人が確実に飢死する。 マーシャ村：植林，泉の保護，農業学校，保健衛生，教育等が，マーシャ村に定着した。10km奥地のアダグイヤ地区に広がりつつある矢先の1989年10月，マーシャ村は解放戦線に占領された。 JVC：①マーシャ村が解放され，プロジェクトが再開できるまでの間，スタッフ研修等行いながら待機する。②北部エリトリア州で活動中のNGOsと協力し，緊急食糧援助に参加する。また，活動の空白地帯チグレ州への道が開き次第，同州で活動を開始する。	CRDA，WFP，犬養道子・みどり一本運動，モラロジーMIRC，東京グリーン・ウォーク，西本願寺，チャリティ・サイクル，Tree for Lifeの会，中部善意銀行，朝日新聞厚生文化事業団，毎日新聞社会文化事業団 チャリティーカレンダー	鈴木直喜，山田　盛，江原浩昭，江原広美，田尻真由美，イエットベルク，ソロモン，バレタ，ダニエル，エシャトー，トーマス，シュクール

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ （ゲドー郡） ハルバ・キャンプ （ゲドー郡）	昨年11月～12月にかけ，例年の倍以上の雨が降ったが，収穫したばかりの作物が畑で腐ってしまった。 昨年6月から着手したUnit 15と16の農場で初収穫があった。タマネギが主に作られたが，市場価格の暴落のために豊作のわりには収入が少なかった。 各々の農場では難民と地元民が共同営農している。本国帰還の登録が進む中で，難民がポンプをエチオピアに持って帰るのではと心配する一部の地元民が，自分の家にポンプを引き上げたりしている。	UNHCR， 仏国土をつくろう会	金子一弘，シアッド， ムハボ， 磯田厚子，中野周二， アオキ，アブディナサル， ヒレ，ラシッド
ジャララクシ・キャンプ （ヒラン郡）	昨年10月頃から，農業省から認可された100haの土地で新農場が建設されている。この農場が現在抱える問題は，一つの農場としては規模が大きすぎることだ。103家族，100haをまとめるのは容易ではない。ポンプの揚水能力にも限界がある。この二つの問題を解決しなければならない。	UNHCR R.I.-Japan	船川秀夫，シュクリ
カンボジア カンポット県 プノンペン カンダール県	**●サンタピエップ技術学校／ワークショップ** 87年8月から現在まで6台のトラックのエンジン・オーバーホールを終え，現在そのうち5台が稼動中である。ほかにブレーキを中心とした中程度の修理が約20台，熔接や塗装などの修理を入れると約150台のトラックの修理を行ってきたことになる。 カンボジア人スタッフは現在32名おり，その中には技術学校の第一期卒業生13名が含まれている。 第二期の授業は88年11月から一年間の予定で開始された。生徒はスタッフ23名で，孤児2名を含む。教育省より送られた2名は勉強を終えプルサットへ帰った。7月初めから，機械工，板金工，訓練生合計5名が新たに加わった。スタッフ等25名が4つのグループに分かれ，日本人技術者の指導のもとに実習をかねた車の修理を行っている。 8月下旬より新しいメンバーのグループを中心に理論の学習を始めた。また，三菱の部品が着き，訓練生を中心にしたグループからエンジンのオーバー・ホールを始めた。 今年度の目標は，生徒が実習の経験を十分に積めるようにするため，エンジン，車体すべてのほぼ完全な修理を20台以上行うことである。そのため，トラック10台分の新品のスペアパーツ，パッキン等，定期交換部品10台分が必要とされる。 **●RINE（ライン）プログラム〔母子保健活動〕** 9月から11月にかけて断続的に1ケ月間の村の助産婦卒後研修を行った。この研修から，母親カードを使用し始め，村の助産婦は妊娠の異常を早期に発見できるよう研修を受けた。次は伝統的産婆の1週間の訓練を計画している。 12月にプノンペン郡16ケ村で，村の一般的な実態調査を行った。これは村レベルでの保健活動を行うための基礎資料となる。 11月末よりプノンペン郡病院・RINEセンター敷地内で，小規模ながらFood Productionを始めた。今のところ野菜畑だけであるが，今後，魚の養殖，養鶏と進めていく予定である。作物は入院患者の食事，RINEの補助給食に使いたい。 **●井戸掘り・給水** 今年の計画は，30本の井戸を掘ることである。今までにプノンペン市内で7本，カンダール県内で10本（そのうち1本は水源に行きあたらなかった），コンポン・ソム市で6本の合計23本の井戸が掘られた。	創価学会青年平和会議，モラロジーMIRC，立正佼成会，日産労連，西本願寺，善興寺ダーナ基金，高岡寺族青年会，覚法寺，「チャリテイ・ウオークかながわ」，毎日新聞大阪社会事業団，国際ソロプチミスト千代田，明るい社会づくり運動神奈川県協議会，浄土宗東京教区青年会，和平基金，国際保健協力市民の会（SHARE）仏教救援センター，四日市商業高校，日蓮宗宗務院，横浜市「世界ふれあいキャンペーン」，「お告げのフランシスコ姉妹会」，中部善意銀行，「カンボジア会」，チャリティーカレンダー，堺市ロータリークラブ，日本ボーイスカウト広島第20回全日本仏教青年会，カリタス・ジャパン，「第1回チャリティー・コンサート」，我孫子「ムダの会」	古西　勇，馬　清， 杉江美子，本橋　栄 〔カウンター・パート〕 （運輸省） タック・カン，アム・ディエン，メアス・サメット，ゲット・ソーン，カム・ボラ （保健省） アン・サルン医師 （カンダール県保健局） ニム・ニエム医師 （農業省水利局） セン・ロー

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
タイ バンコク事務所	①総務，会計，資金調達 ②各機関（国連，タイ政府，日本大使館，各国民間援助団体）及び東京事務所，ラオス・カンプチアを含む，各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集，広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整 1月15日，16日，昨年台風ゲイの被害をうけたチュンポン県，タセ，パティウ地区の視察。タセ地区では，51の小学校のうち90%が被害をうけ，いまだにテントを張って勉強している状態。JVCとしては教材，又は給食の援助を検討中。	全国社会福祉協議会 電力労連	ポンピモン，カモン， 大石道子，チャタヴァデ 主婦ボランティア15名
カオイダン （カンボジア 難民キャンプ）	**●西崎憲司記念技術学校** 「本国帰還のためのトレーニングセンター」と名を改めたカオイダンキャンプでの新学期にそなえ，UNHCRと交渉の結果，バンタットキャンプからも生徒を受け入れることになった。現在，1000人をこす希望者と面接中。ゆくゆくは国境沿いのUNBROキャンプからも生徒をうけいれられないか，という話がある。	UNHCR， SV(Stichting Vluchteling)	清水　俊弘， ソムヨット・ラタナタム， スティ・ネップラコン， 久津輪　雅
バナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	**●日本語学校** ・日本定住予定者へのプログラム ①日本語教育　②日本文化・習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション ・2月5日，ラオス難民の第1グループ，11家族27名が日本に出発するため，日本語学校は5クラスとなる。ベトナム難民2名も2月中旬に日本へ出発する。 ・12月27日，文化オリエンテーションを行った。日本映画の鑑賞，ひらがなゲーム，日本料理を作り，生徒との交流を図った。 生徒数　ラオス　47名 ベトナム　3名　計50名	天理教千葉 R.I.-Japan	竹村雅義，熊沢ゆり， チャワリット・ドゥワンボム
地域開発(CD) （バンコク市内のスラム地区） （ブリラム県のM村）	**●奨学金プロジェクト** スポンサーへの年賀状の発送を終えた。 15日から一週間，昨年台風の被害のあったチュムポン県への調査を兼ねて南部を訪れ，ナコンシータマラート県のフェイコーで，27人の児童に奨学金支給 **●クロントイ図書館** 13日，プラティープ財団付属の幼稚園と共同で1,2,3区の高速下で子供たちのためのイベントを行った。 **●農村開発** 18日に伝統医療に基づいたサウナ施設のオープニング・セレモニーを行った。	モラロジーMIRC， Tree for lifeの会，雄勝町町内寺院会，国際ソロプチミスト駿河，長谷川勉チャリティーウォーク，JOFIC，電力労連，からし種，チャリティーカレンダー	コメン・スンスマン， リラ・クンナロン， サムルアイ・ ジョンヨークラン， 今泉　恵
ラオス （ヴィエンチャン県 ボーリー・カムサイ県 カンムアン県）	**●生活改善指導員養成プロジェクト** 第一回トレーニングは10月20日に終了し，研修生は生活改善指導員として出身地域に帰り，母子保健を中心とした普及活動を始めた。また地方の普及活動の拠点として計画した3つの母子センターの建設も順調に進んでいる。 現在，JVCのスタッフは地方の指導員を巡回して激励する一方，4月に始まる農業コースの準備にあたっている。1月末には農業コースのラオス人講師のための，東北タイ・スタディー・ツアーを計画している。	UNDP 庭野平和財団 難民と地球の緑を考える会 横浜インターナショナル・ウイミンズクラブ スコティッシュ・ナイト・イン ・専修寺 聖ヨゼフ老人ホーム，新潟愛の架け橋バザー	谷山博史，北詰秋乃， 原田恵津子 堺市ロータリークラブ， 老人ホーム天寿荘，チャリティーカレンダー

Trial & Error（試行錯誤トライアル・アンド・エラー）第97号
発行日　1990年2月20日発行（毎月20日発行）通巻97号
1982年8月16日第三種郵便物認可

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとはーJapan International Volunteer Centerは1980年2月，タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの，インドシナ難民の大量流出をきっかけに，日本から駆けつけた若者と，現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり，現在の組織の原形ができました。JVCは，活動者の自発的な意志に基づき，日本の個人・団体からの寄付金，国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは，人種，国籍，習慣，宗教その他の信条の違いを越えて，難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について――会員は，総会に出席し，JVCの方針などを決定する他，情報・資料の入手，各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

・正会員（一般会員　10,000円　活動者会員　3,000円
　団体会員　30,000円　学生会員　3,000円）
・賛助会員　金品による支援（金額は自由です。）

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

・毎号1冊送付　年間購読料　3,000円
・毎号4冊送付　年間購読料　10,000円

▶送金の方法ー下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

①会員：東京5-48365　加入者名－JVC会員係
②T/E：東京3-54186　加入者名－JVC東京事務所
（住所，氏名，購読開始月をお書き添え下さい。）

編集後記

▶中村尚司さんにご病気と知らず原稿を依頼した。二度目の手術の直前に，痛みを押して書いてくださった原稿を速達でいただき，間違えて短く依頼していたことを発見し，二重に申し訳ない気持になった。先日，喉頭癌を手術して10年，声を取り戻した人の歌を聞いた。中村さんには早く元気になって欲しいと願うばかりである。（岩崎み）

▶特集の執筆者の中に，高校時代の同級生がいる。原稿を依頼するために卒業以来15年ぶりに会って酒を酌み交わした。高校，大学の友人の多くが企業戦士として日本経済を支えるため黙々と働いている中で，アジアや第三世界の問題に取り組んでいる仲間がいたことがとても嬉しくうまい酒だった。（山口）

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動ー救援活動をより充実させるため，以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

A.アフリカ難民救援募金　（1月小計 112,500円）アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。

B.グリーン・フォー・アフリカ募金　（1月小計 142,500円）アフリカの土壌回復，農業，植林等に使われます。

C.インドシナ難民救援募金　（1月小計　4,500円）タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。

D.カンボジア募金　（1月小計 210,900円）カンボジア国内の復興のために使われます。

E.タイ・スラム募金　（1月小計　56,500円）バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。

F.スラムの子供奨学金・基金（1月小計 231,000円）バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。

G.タイ農村募金　（1月小計　52,580円）タイの農村開発のために使われます。

H.定住難民募金　（1月小計　10,500円）定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。

I.JVC運営経費募金　（1月小計　55,182円）現場を支えるのに不可欠な事務運営経費，人件費に使われます。

J.ラオス募金　（1月小計 150,500円）ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。

K.無指定募金　（1月小計1,123,218円）

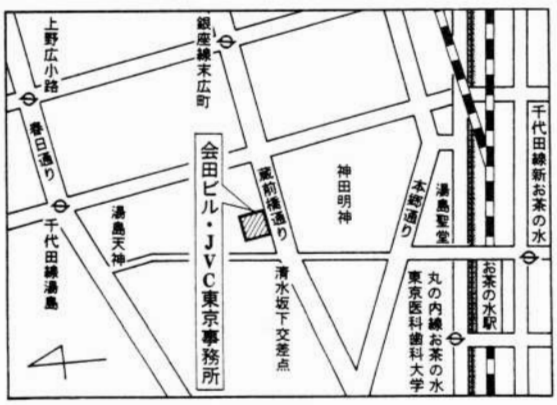
▶送金の方法－下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9－27495（募金種目名をご記入下さい。）
加入者名－JVC東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497　（1月小計190名　1,165,905円）

犬養道子さんの御厚意により，JVCに上記の口座を設けました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

Trial & Error は再生紙を使用しています



1990年2月20日発行（毎月20日発行）
編集人　岩崎美佐子　山口誠史　池島千津子
発行人　林　達雄
発行所　日本国際ボランティアセンター（JVC）東京事務所
〒113　東京都文京区湯島3－1－4　会田ビル5階
☎03（834）2388　FAX：03（835）0519
Telex：7604025　JVCHQ UC
神奈川事務所　〒231 横浜市中区山下町2　産業貿易センタービル9F　㈶神奈川県国際交流協会内　☎045（671）7082
印刷所　(株)ベスト・プリンティング
＊本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。